71
501

始

庚詩集

71
501

愛詩集

土屋弘

大正
4. 5. 26
内交

緒言

一、凡そ詩文は。悟境あることを知らざる可からず。悟境は。人々の心に在るものなれば。父は之を其子に傳ふる能はず。子も之を其父に語るを得ず。謂はゆる。心を以て。心に傳ふとは。是れなり。然らば。何如にして。古人の心を得て。悟境に達すべき乎。他無し。亦唯古人精妙の詩文を。熟讀諳誦し。いつとも無く。古人の心を得るに在るのみ。故に平生學ぶ所は。務めて駁雜汎濫を

避け。惟れ精。惟れ一。以て古人の佳篇を反覆玩味すべし。今此に詩を學ぶ者の爲めに。唐詩中に就き。其尤も精且雋なる者數十篇を鈔出し。以て之を示す。人或は謂はん。篇數甚少きに似たりと。余曰く。材料を貯ふるは。多からざるべからず。悟境に達するは。多きを須ひざるなり。夫の文の如きは。別に編錄あり。

一、詩は。唐代を以て正宗と爲す。唐詩を學ぶときは。則上は漢魏三百篇に溯り。下は宋元明清の境を開くを

得べし。此れ是の編。專ら唐詩を取る所以なり。

一、欄外の評は。予の僭越を顧みずして筆する所なり。此れ初學の爲めに。其慧心を啓んと欲するのみ。敢て大方に示すにあらず。

一、註解は。諸家の說に據る。就中。杜詩の如きは。浦起龍の解を採るもの。多きに居る。而して其文は。大率檃括節略す。故に一々其氏名を揭げざるなり。

一、古人の名篇佳製を熟讀玩味すべきは。無論の事な

れども。亦自から作りて。其心に得たる所を實驗せざるべからず。否らざるときは。徒に言論に長じて。運用に短なるの弊を免れざるべし。此れを趙括の兵法と謂ふ。卽父の書を講ずるに巧にして。實戰に應ずるに拙きなり。因りて。卷末に詩論鈔を附載し。以て作詩上の注意を喚起せんと欲す。

明治四十四年八月　鳳洲土屋弘識

評註唐詩雋目次

五言古

◎述懷……魏徵……一
◎覇丘覽古……陳子昂……四
◎感遇……張九齡……五
◎子夜吳歌……李白……七
◎經下邳圯橋懷張子房……同……八
◎後出塞其一……杜甫……九
◎同其二……同……一二
◎玉華宮……同……一三
◎望嶽……同……一四
◎奉贈章左丞丈二十二韻……同……一五
◎義鶻行……同……一八
◎送別……王維……二〇
◎幽居……韋應物……二二

七言古

◎滕王閣……王勃……二三
◎代悲白頭翁……劉廷芝……二四
◎高都護聰馬行……杜甫……二六
◎送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白……同……二八
◎丹青引贈曹將軍霸……同……三一
◎短歌行贈王郎司直……同……三五
◎兵車行……同……三七
◎戲題王宰畫山水圖歌……同……三〇
◎夢遊天姥吟別東魯諸公……李白……四一
◎雉帶箭……韓愈……四四
◎山石……同……四五

五言律

◎野望……王績……四七
◎塞下曲……李白……四八
◎送友人入蜀……同……四九
◎題義公禪房……孟浩然……五〇
◎觀獵……王維……五一

◉房兵曹胡馬……杜甫……五一
◉破山寺後禪院……常建……五二
◉訪戴天山道士不遇……李白……五三
◉重題鄭氏東亭……杜甫……五三
◉太湖石……白居易……五四
◉送秘書晁監還日本……王維……五五

七言律

◉黃鶴樓……崔顥……五六
◉登金陵鳳凰臺……李白……五七
◉早朝大明宮呈兩省僚友……賈至……五九
◉和賈至舍人早朝大明宮之作……王維……六〇
◉望岳……杜甫……六一
◉恨別……同……六二
◉左遷至藍關示姪孫湘……韓愈……六三
◉庾樓曉望……白居易……六四
◉江樓夕望招客……同……六四

五言絕

◉易水送別……駱賓王……六五
◉鹿砦……王維……六六
◉詠史……高適……六六
◉平蕃曲……其一……劉長卿……六七
◉同……其二……同……六八
◉和張僕射塞下曲……盧綸……六八
◉襄陽曲……李白……六八
◉晚望……白居易……六九
◉江雪……柳宗元……六九

七言絕

◉涼州詞……王翰……七〇
◉黃鶴樓送孟浩然之廣陵……李白……七一
◉陪族叔刑部侍郎及中書舍人賈至遊洞庭湖……同……七一
◉望天門山……同……七二
◉早發白帝城……同……七二

◉蘇臺覽古……同……七二
◉越中懷古……同……七三
◉上皇西巡南京歌……同……七三
◉江南逢李龜年……杜甫……七四
◉從軍行……王昌齡……七五
◉山房春事……岑參……七六
◉題長安主人壁……張謂……七六
◉江南行……張潮……七七
◉渡桑乾……賈島……七七
◉楓橋夜泊……張繼……七八
◉塞下曲二首……張仲素……七九
◉同李十一醉憶元九……白居易……八〇
◉王昭君……同……八一
◉送崔郎中赴闕……同……八一
◉江村即事……司空曙……八一
◉石頭城……劉禹錫……八一
◉涼州詞……王之渙……八二
◉十五夜望月……王建……八三
◉歸雁……錢起……八三
◉聞白樂天左降江州司馬……元稹……八四
◉暮春歸故山草堂……錢起……八五
◉上汝州郡樓……李益……八五
◉從秦城同再題武關……李涉……八五
◉城西訪友人別墅……雍陶……八六
◉夜雨寄北……李商隱……八七
◉華清宮……崔魯……八八
◉泊秦淮……杜牧……八八
◉經汾陽舊宅……趙嘏……八九
◉隴西行……陳陶……九〇
◉己亥歲……曹松……九〇
◉閿鄉寓居……吳融……九一

◉詩論鈔附載

◉總論……九三
◉樂府……九四

◉五言古詩……九六
◉七言古詩……九八
◉近體律詩……一〇〇
◉排律……一〇三
◉五七言絶……一〇四
◉六言詩……一〇五
◉竹枝詞……一〇六
◉和韻の詩……一〇六
◉聯句の詩……一〇七
◉詩餘……一〇七
◉嚴滄浪の詩説……一〇八
◉姜白石の詩説……一一〇
◉情景……一一三
◉起承轉合……一一五
◉讀杜法……一一五
◉帳中歌……一一六
◉大風歌……一一六

評註

唐詩雋目次終

評註

唐詩雋

五言古

述懷

魏徵

字は玄成、魏州曲城の人、諫議大夫に拜す、貞觀三年、秘書監を以て、朝政に參預し、鄭國公に封ぜらる、

中原還逐鹿投筆事戎軒縱橫計不就慷慨志猶在杖策謁天子驅馬出關門請纓繫南越憑軾下東藩鬱紆陟高岫出沒望平原古木鳴寒

【評】慷慨句此全篇之根豈不二句承上起下此爲要緊

土屋弘編

之處。而一結陡舉。筆力奇橫。吐氣如虹。

鳥空山啼夜猿。既傷千里目。還驚九折魂。豈不憚艱險。深懷國士恩。季布無二諾。侯嬴重一言。人生感意氣。功名誰復論。

【註】唐書本傳に、魏徵少して大志あり、京師に來り、未だ名を知られず、自から請ひて、山東を安輯す、乃ち秘書丞に擢でられ、驛を馳せて黎陽に至る、此の詩は、蓋驛を馳せ、關を出るときの作なり、○逐鹿。史記に、秦は其鹿を失ふ、天下共に逐ふ、秦が其國を失ひしことに喩ふ、○戎軒は、兵車を謂ふ、○慷慨は、激昂の意、○請纓。漢は、終軍をして、南越に使せしむ、終軍請ふらく、願くは長纓を受け、必南越王を羈して、之れを闕下に致さんと、○憑軾。酈食其曰はく、臣請ふ、齊王に說くを得て、漢の爲めに、東藩と稱せしめんと、乃ち齊王田廣に說き、歷下の兵を罷む、軾は、車前の横板なり、憑軾とは、其車を下るに及ばずして、其說の成りしを言ふなり、本傳に、徵の黎陽に至りし時、李勣、尙ほ李密の爲めに守る、徵は、勣に書を與へて云々、勣遂に計を定めて唐に歸す、且是の時、新羅、突厥の諸夷、中國を侵亂す、徵復た山東を安輯す、故に此の二語あるなり、卽此の二つの故事を假りて、以て己の志を言ひたるものなり、○蔚紆云々、言ふは高岫の蔚紆たるに陟り、平原の出沒せるを望むなり、(山に穴あるを岫といふ)、○九折魂。漢書王尊の傳に、瑯琊の王陽、益州の刺史と爲り、部を行ぐる、邛郲の九折阪に至り、歎じて曰く、先人の遺體を奉じ、奈何ぞ數〻此の險に乘ぜんと、後に病を以て去る、尊が、益州の刺史と爲るに及び、其阪に至り、其馭を叱して曰く、之れを驅れよ、王陽は孝子と爲る、王尊は忠臣と爲ると、○不憚艱險。蜀志、關羽の傳に、羽、先主に隨ひて周旋し、艱險を避けずと、○國士恩。本傳に、徵、山東に宣慰す、其時に曰へることあり、吾既に國士の遇を蒙る、敢て國士を以て報ぜざらんや、○季布。漢書に、季布任俠にして名あり、楚人の諺に曰く、黃金百斤を得るよりは、季布の一諾を得るに如かずと、○侯嬴。戰國策に、魏

の侯嬴、夷門の監者と爲る、公子無忌、其計を用ひ、符を竊みて、趙を救ふ、嬴請らく、公子の行く日より、以て晉鄙の軍に至るまでの日を數へ、北に鄉ひ、自から剄ね、以て公子を送んと、後果して其言の如くせり、○意氣。後漢書に、楊喬曰く、侯生は意氣の爲めに、頸を刎ねたり、意氣は、恩顧を謂ふなり、

薊丘覽古　陳子昂

陳子昂　字は伯玉、梓州射洪の人、少して書を金華山に讀み、尤善く文を屬す、武后の時、靈臺正字に擢でられ、右拾遺に遷る、集十卷あり、

南登碣石館、遙望黃金臺。丘陵盡喬木。昭王安在哉。覇圖悵已矣。驅馬復歸來。

【註】子昂の序に云く、丁酉の歲、吾北征し、薊門より出で、燕の舊都を歷觀す、其城池、覇迹、已に蕪沒せり、乃ち慨然として仰歎し、樂生郯子、群賢の游、盛なりしことを憶ひ、因りて薊樓に登り、六首を作り、以て之を志るす云々、此の詩は其一なり、

一統志に、薊丘、順天府舊燕城の西北隅に在り、卽古の薊門なり、傍に林木多く、蓊鬱蒼翠、京師八景の一なり、

碣石宮。史記に、騶衍、燕に如く、昭王請ひて、弟子の座に列し、業を受け、碣石宮を築き、身親しく往き、之れを師とす、○黃金臺。昭王、千金を其上に置き、以て天下の士を延きたり、故に名づく、○阮籍の詩に、簫管有遺音、梁王安在哉。又籍の句に、驅馬復來歸とあり、

【評】丘陵、二句、何等感慨。全篇句法雅潔。不事彫繪。是短古之法。

感遇　張九齡

張九齡　字は子壽、韶州曲江の人、七歲文を屬するを知る、玄宗卽位し、右補闕に遷り、中書侍郎に進み、同平章事に拜す、諤々として臣節あり、直道を以て黜らるゝ雖、戚々嬰翌せず、唯文史自ら娛む、集二十卷あり、

孤鴻海上來。池潢不敢顧。側見雙翠鳥。巢在三

【評】第一解、總叙。

孤鴻雙翠鳥。第二解。承翠鳥二句。末解應起手。以爲結。格局渾成。

珠樹嬌々珍木巔。得無金丸懼美服。患人指高明。逼神惡。今我遊冥冥。弋者何所慕。

【註】感遇は、遇ふ所に感ずるを言ふ、唐書本傳に、九齡、中書令に遷る、李林甫、内に之を忌む、帝將さに牛仙客を以て、尚書と爲さんとす、九齡執りて不可とす、林甫進て曰く、仙客は宰相の才なり、乃ち尚書に堪へざらんや と、帝是に由り、仙客を遇づけ、九齡の政事を罷む、故に託して孤鴻の詞を爲し、自から比するなり、

三珠樹。山海經に、三珠樹は、赤水の上に生ず、其樹は柏の如く、葉は皆珠を爲すと、此は蓋林甫仙客が、三公の位に據るを指すなり、○嬌々は、高く擧る貌○西京雜記に、韓嫣、彈を好む、金を以て丸と爲す、○揚雄の解嘲に、高明の家、鬼其室を瞰ふと、高明は、貴顯を謂ふなり、○揚子法言に、鴻冥に飛ぶ、弋人何ぞ慕はんと見ゆ、

子夜吳歌　李白

字は太白、蜀の人、十歲にして詩書に通じ、縱橫術、擊劍を喜び、任俠を爲し、財を輕じ、施を重ず、天寶の初、長安に至る、賀知章、玄宗に言ふ、詔ありて、翰林に供奉たり、意を貴妃に失ひしにより、金を賜ひて放還す、祿山反す、永王璘、東南に節度たり、白、時に廬山に臥す、璘迫りて之を致す、璘敗るに及び、白、坐して潯陽の獄に繫がれ、夜郎に流さる、遂に洞庭に浮び、峽江に上り、巫山に至る、赦を以て釋さるを得たり、岳陽江夏に憩ひ、之に久しうして、復た潯陽に往き、金陵を過ぐ、族人陽冰、當塗の令と爲る、白之れに過ぎり、病を以て卒す、年六十四、艸堂集二十卷あり、

長安一片月。萬戶擣衣聲。秋風吹不盡。總是玉關情。何日平胡虜。良人罷遠征。

【註】子夜吳歌。樂錄に、濟商の曲、晉の女子、名は子夜、此の歌を作る、歌聲過哀なり、吳歌と謂ふものは、東晉の都は、吳の地なる故なり、○丹鉛錄に、字林

【評】一起十字。寫盡長安秋夜狀況。眞是入神之筆。

に云ふ、直に舂くを搗と曰ふ、古人は衣を搗くに、兩女子對立し、一杵を執る、米を舂くが如し、今易へて、臼杵と作す、對坐して之を搗くは、其便を取るなり、梁の簡文帝の詩に、欲知妾不寐。城外搗衣聲。○玉門關は、沙州燉煌郡壽昌縣の西北に在り、長安を去ること三千六百里、

經下邳圯橋懷張子房　李白

子房未虎嘯。破産不爲家。滄海得壯士。椎秦博浪沙。報韓雖不成。天地皆震動。潛匿遊下邳。豈曰非智勇。我來圯橋上。懷古欽英風。唯見碧流水。曾無黃石公。歎息此人去。蕭條徐泗空。

【註】明の淮安府の邳州、唐の下邳縣、州城の東南に、圯橋あり、卽張良が、黃石公に遇ひし處なりと云ふ、

【評】一結感慨。蓋太白以子房自許。而傷時無知己也。○智勇二字。一篇斷案。

虎嘯。虎嘯いて風冽しきは、君臣の際會せるに喩へたるものなり、此れは、子房が、未だ高祖に遇はざりしを言ふ、○椎秦。此は子房が、鐵椎を以て、秦の始皇を、河南開封府の陽武縣の博浪沙に於て、擊ちたることを云ふ○徐泗。唐の時、徐州泗州相接し、河南に屬す、而して下邳縣は、徐州の彭城郡に在り、泗水は山東の陪尾山に出で、西南は徐州を過ぎ、東南は邳州を過ぎ淮に入る、○太白の目中には、唯子房あるのみ、故に空しと云ふ、

後出塞　杜甫

字は、子美、襄陽の人、進士に擧げられ、第せず、因りて、長安に遊ぶ、玄宗の朝に、賦三篇を奏す、帝之を奇とし、集賢院に待制せしむ、數〻賦頌を上つり、高く自ら稱道す、肅宗立ち、右拾遺に拜す、後出されて華州の司功と爲り、飢亂に屬し、官を弃て、秦州に客たり、薪を負ひ、橡栗を採り、自から給し、劍南に流落す、嚴武表して、參謀と爲し、工部員外郎を以て、襲梓の間に往來す、大曆中、來陽に客たり、一夕大に醉ひて卒す、年五十九、甫放曠にして自から檢せず、好みて天下の事を論ず、高くして切ならず、數〻

嘗て喪亂に遭ひしも、節を挺て、浮す所無し、歌詩を爲り、時の撓弱を傷み、其情は、一日も君を忘れず、人其忠を憐むと云ふ、集六十卷あり

【評】讀起輒不覺扼腕、送行實況。結筆神勇。

其一

男兒生世間、及壯當封侯、戰伐有功業、焉能守舊丘、召募赴薊門、軍動不可留、千金裝馬鞍、百金裝刀頭、閭里送我行、親戚擁道周、斑白居上列、酒酣進庶羞、少年別有贈、含笑看吳鉤。

【註】後出塞。此の詩は、樂府體なり、○安祿山數ゝ奚契丹を侵略し、兵を東都に徵し、重賞を以て士を要し、志益ゝ驕り、反計已に決す、故に是の詩を作り、以て諷したるなり、原五首あり、

【評】勁拔簡嚴。得結十字。全篇活動。

男兒の四句を以て冒頭と作す、召募の四句は事を點じて、色を生ず、閭里の句より、末に至るまで、旁筆を以て、行色を襯す、而して結語の、笑を含む云云は、肉飛び眉揚る、恰も封侯の句と對照せり、

吳鉤。吳越春秋に、闔閭命じて、金鉤を作らしむ、人あり其二子を殺し、以て血ぬり、之を獻ず、王曰く、何を以て異なるか、鉤師、二子の名を呼ぶ、吳鴻よ、扈稽よ、我此に在りと、聲の口に絕ゆると同時に、兩鉤は、俱に飛びて、父の胸に着きたり、吳王大に驚く、云々

其二

朝進東門營、暮上河陽橋、落日照大旗、馬鳴風蕭蕭、平沙列萬幕、部伍各見招、中天懸明月、令嚴夜寂寥、悲笳數聲動、壯士慘不驕、借問大將

誰恐是霍嫖姚

【註】此篇は、軍容を寫せるなり、又徵兵の地を點醒す、○進營は、始て隊伍に入るなり、上橋は、初て程に登るなり、落日將さに沒せんとするときは、幕を列し、營を安すべし、初て軍に從ふものは、紀律未だならはず、故に部伍は須らく招くべし、此の時は、尙喧擾を免れず、夜に入れば、自然に寂然として聲無し、悲笳は、營を靜むるの號令なり、大將は召募統軍の將官を指す、故に嫖姚を以て之に比したり、蓋霍去病は、嘗て大將軍衞靑に從ひて、塞を出でたる者なり、○一篇は、景を夾みて、叙述せり、故に詩中に、聲あり、又彩あるなり、○東門は、長安城の東門なり、○河陽橋は、洛水の橋なり、朝に軍を整へて、暮に軍を發するは、其速なるを見るべし、○落日大旗は、旗高うして、夕陽は其上を照すを云ふ、○部伍は、旗下の偏裨を云ふ、見招は、よばれて號令を聽くなり○嫖姚は、勁疾の貌なり、漢の霍去病は、邊功を立て、威名を著はしたり、因りて嫖姚校尉と爲る、是れ其比する所以なり、

玉華宮　杜甫

【評】起六句寫山中古殿精妙入神。中腹造句豪宕。末尾有無限感慨。

溪回松風長蒼鼠竄古瓦不知何王殿遺構絕壁下陰房鬼火青壞道哀湍瀉萬籟眞笙竽秋色正瀟洒美人爲黃土況乃粉黛假當時侍金輿故物獨石馬憂來藉草坐浩歌淚盈把冉冉征途問誰是長年者

【註】貞觀二十一年、玉華宮を作る、務めて菲薄に從ふ云々、蓋儉德なり、坊州宜君縣北鳳皇谷に在り、永徵二年、廢して寺と爲す、

此篇は、分明に、唐初の建造なることを知る、然るに、不知何王殿と云ひしは、蓋先世は、かく卑宮の遺意なるに、後世子孫は、敬承することを知らずと、かく

明に貞觀の儉を言ふときは、是れ、あらはに天寶(玄宗)の奢を形はすものなり、○石馬は、此の宮中にありし物○盈把、淚下りて、掌に滿るなり、○冉冉は、行き移る貌、○征途。此の時、杜子鳳翔より、鄜州に赴く、故に云ふ、又生涯を衆ねて言ふなり、

【評】簡健峻拔。眼空一世。至其氣勢壯闊。則前無古人。

望嶽　杜甫

岱宗夫如何。齊魯青未了。造化鍾神秀。陰陽割昏曉。蕩胸生層雲。決眥入歸鳥。會當凌絕頂。一覽衆山小。

【註】杜子の、齊魯に遊びたるは、開元二十五六年の間に在り、望嶽は、泰山を望みたるなり、○岱宗は、泰山なり、其嶽勢を寫せるは、僅々青未了の三字のみ、而して他人の千百言にも勝れり、鍾神秀は、嶽勢の前に在りて、推し出せり、割昏曉は、嶽勢の上につきて、顯はし出す、蕩胸決眥は、明かに望の字を照らす、末の二句は、將來の凌眺を期す、是れ透過一層の法なり、作者の氣魄は此れにて觀るを得べし、

【評】雄渾宏肆。打漢魏六朝。以爲一丸。

奉贈韋左丞丈二十二韻　杜甫

紈袴不餓死。儒冠多誤身。丈人試靜聽。賤子請具陳。甫昔少年日。早充觀國賓。讀書破萬卷。下筆如有神。賦料楊雄敵。詩看子建親。李邕求識面。王瀚願卜隣。自謂頗挺出。立登要路津。致君堯舜上。再使風俗淳。此意竟蕭條。行歌非隱淪。騎驢十三載。旅食京華春。朝叩富兒門。暮隨肥

馬塵殘杯與冷炙到處潛悲辛主上頃見徵歎
然欲求伸青冥却垂翅蹭蹬無縱鱗甚愧丈人
厚甚知丈人眞毎於百寮上猥誦佳句新竊效
貢公喜難甘原憲貧焉能心怏怏秖是走踆踆
今欲東入海即將西去秦尚憐終南山回首清
渭濱常擬報一飯況懷辭大臣白鷗沒浩蕩萬
里誰能馴

【註】韋左丞。舊唐書、韋濟の傳に、天寶七載、尚書左丞に遷る、○此の詩は、天寶六載、天下に詔し、一藝あるものは、轂下に詣らしむ、李林甫尚書省に命じて、試みしめ、皆之れを下す、遂に賀して、野に遺賢無しと云ふ、杜子も、此の時、詔に應じたりしも、退下せられ、將さに東都に歸らんとする時の作なり、

一起の四句は、憤激して筆を起し、韋丞と、自己とを並べ、提げ出したり、甫昔の一段は、壯心を敍せるなり、尤妙は、自謂云々の四句に在り、謂はゆる、空に横はる盤屈の語とは是れなり、觀國賓は、杜子二十餘歲にして、貢舉せられしことを云ふ、楊雄と、曹子建とを以て、自から比せるなり、李邕と、王翰とは、杜子同時の前輩にして、識面と、卜隣とは、當時の事實を記したるなり、

此意の一段は、其職を失へるを慨するなり、而して前の八句は、泛然と述べ、後の四句は、事實に入り、明晰なり、主上云々は、彼の詔に應じたることを云ふ、青冥(天を云ふ)蹭蹬(勢を失ふ貌)は、退下せるを云ふ、

甚愧より、末尾に至るまでは、韋丞に贈る本旨なり、貢公喜、此は漢の王吉と、貢禹との關係を云ふ、當時の人、王揚、位に在るときは、貢禹は冠を彈すと云ひたり、そは、二人は親友にして、其取舍の同じきことを云ひたるなり、怏々と、踆々とは、杜子が、心口を以て、自から問答して、進退徘徊せるさまを云ふ、

即國を去るの思ひは、あれども、猶君を慕ふの心は、決然として去るに忍びず、故を以て、大臣の推薦に眷々たるなり、終南山は、京兆萬年縣に在り、渭水は、萬年縣の北に在り、而して尚憐と云ひ、回首と云ふ、其朝廷に戀々たるの情知るべし、謂はゆる、悻々然として、急に去るの徒にあらざるなり、常擬報一飯の句は、是れ平生精神の在る所なり、然れども、其去んと欲する志は、終に回へすべからず、故に脂韋無骨の語を作さず、自から白鷗の遠く去るを以て擬す、其心術の厚き、人心の高き、倶に見るべきなり、

【評】奇勢跌宕。運筆矯健。

義鶻行　杜甫

陰崖有蒼鷹。養子黑柏巔。白蛇登其巢。呑噬恣口無半存。其父從西歸。翻身入長煙。斯須領健鶻。痛憤寄所宣。斗上捩孤影。嗷哮來九天。修鱗脫遠枝。巨顙拆老拳。高空何蹭蹬。短草辭蜿蜒。折尾能一掉。飽腸皆已穿。生雖滅衆雛。死亦垂千年。物情有報復。快意貴目前。茲實鷙鳥最。急難心炯然。功成失所往。用捨何其賢。近經滮水涓。此事樵夫傳。飄蕭覺素髮。凜欲衝儒冠。人生許與分。亦在顧眄間。聊爲義鶻行。水激壯士肝。

【註】此れ、實に一奇事なり、昔人謂ふ、子長の刺客傳と、雄を千古に爭ふと、第一段は、其事を叙するなり、健鶻の二句は、筆勢矯捷なり、第二段、先の八句は、寫生の筆にして、聲勢あり、波折あり、而して明鑒を示す

は、一の飽の字に在り、次の八句は、咏歎の筆を用ふ、語々着實なり、死垂千年とは、猶謂はゆる臭を萬年に遺すの意なり、心炯然とは、謂はゆる皎然として其志を欺かざる者なり、失所往とは、謂はゆる其能に矜らず、其德を、ほこることを、はづるものなり、是れ世の稱する所の賢豪なるものなり、

第三段は、詩を作ることの由を明かにせり、飄蕭の十字は、一氣讀を作すべし、許與顧眄の句は、通篇の結穴なり、

○巨鯨は、白蛇の首を云ふ、老拳は鶻の拳なり、其堅き處の大さは彈丸の如し、鳩鴿の類を空中にして一擊すれば、忽墮つ、卽身を側てゝ、下より之を承く、極めて敏捷なりと云ふ、

滈水は、長安杜陵に在り、西北に流れて、渭水に入る、

送別

王維

字は摩詰、太原の人、九歲にして辭を屬することを知る、開元九年、進士第一に擢でられ、尙書右丞に遷り、草隸に工にして、畫を善くす、名は開元天寶の間に盛なり、寧薛の諸王、待つこと師友の如し、輞川に別墅あり、嘗て裴迪と、其中に遊び、詩を賦して樂みと爲す、孤居三十年、上元の初め卒す、

下馬飲君酒。問君何所之。君言不得意。歸臥南山陲。但去莫復問。白雲無盡時。

【註】單に送別と曰ふときは、是れ古風の題にして、必しも其人あるに非ざるなり、

第五六句は、是れ上の四句の問答を承けて、掉轉したるものなり、

韋應物

韋應物　長安京兆の人、性高潔にして、食鮮く欲寡し、居る所、香を焚き、地を掃ひて坐す、大曆中、櫟陽の令に除す、闕に赴くに迫び、左司郎中に改めらる、詩十卷あり、

貴賤雖異等。出門皆有營。獨無外物牽。遂此幽

【評】一結。含蘊不盡。

【評】幽居一句。領

下六句起結回應章法秩然

居情微雨夜來過不知春草生青山忽已曙鳥雀繞舍鳴時與道人偶或隨樵者行自當安塞劣誰謂薄世榮

【註】有營は、幽居を得ざるを云ふ○道人は、道術ある人を云ふ、○塞は跛なり、不才を云ふ、

一起は、世に傲るが如きも、結末は謙遜に歸す、是れ道人の、道人たる所以なり、

七言古

滕王閣　王勃

字は子安、絳州の人、六歳文辭を善くす、麟德の初、對策して、朝散郎を授げらる、年未だ冠に及ばず、沛王召して、府の修撰に署す、鬬雞の檄文を作くる、高宗怒り、斥けて府を出す、劍南に客たり、父福時、勃の故を以て坐せられ、交趾の令に左遷せらる、勃往て省し、海を渡り、水に溺れて卒す、年二十九、集二十卷あり、時に楊炯、盧照隣、駱賓王と、皆文章を以て、名を齊くす、天下四傑と號す、

王勃

滕王高閣臨江渚佩玉鳴鑾罷歌舞畫棟朝飛南浦雲珠簾暮捲西山雨閒雲潭影日悠悠物換星移度幾秋閣中帝子今何在檻外長江空自流

【註】唐の高祖の子滕王元嬰の建る所、洪州豫章郡城の西漳江の上に在り、鳴鑾は馬鑣の鈴なり、○罷は猶ほ成すと言ふがごとし、此の以上は、滕王全盛の時來遊せられしことをいふ、○畫棟云々棟の高きを云ふ、此の二句は昔時を叙す、○閒雲二句は、今日の寂寥を叙す、○一結は起句に應ず、

【評】前半叙滕王盛時江渚二字已伏末句後半叙其沒後結句令人發深省

代悲白頭翁　劉廷芝

劉廷芝　字は希夷、汝州の人、武后の時、善く閨帷の詞を爲くる、詞古調多し、時と合はず、酒色を好み、落魄して常俗に拘はらず、後、宋之問の爲めに殺さる、詩十卷あり、

洛陽城東桃李花、飛來飛去落誰家。洛陽女兒惜顏色、行逢落花長歎息。今年花落顏色改、明年花開復誰在。已見松柏摧爲薪、更聞桑田變成海。古人無復洛城東、今人還對落花風。年年歲歲花相似、歲歲年年人不同。寄言全盛紅顏子、應憐半死白頭翁。此翁白頭眞可憐、伊昔紅顏美少年。公子王孫芳樹下、清歌妙舞落花前。光祿池臺開錦繡、將軍樓閣畫神仙。一朝臥病無相識、三春行樂在誰邊。宛轉蛾眉能幾時、須臾鶴髮亂如絲。但看古來歌舞地、惟有黃昏鳥雀悲。

【評】一結警醒、是霜夜鐘聲也

【註】誰家の二字は、情有るなり、○桑田滄海は、麻姑の事にて、東海の三たび變じて、桑田となるを見たりと、神仙傳に見ゆ、○寄言云々は、少年の人を呼び醒すなり、○可憐云々、昔の紅顏を思ひて、今の白頭を看る、而して後に眞誠に憐むべし、且つ今の紅顏も、亦何ぞ鑒みざるべけんや、○光祿云々、漢の光祿勳王根は、土山漸臺を起す、○將軍云々、後漢の大將軍梁冀、大に第舍を起し、臺閣周遍す、以上の四句は、少年の時、遨遊せることを說く、○宛轉は、身體の婉

なるを謂ひ、又眉の曲るを謂ひて、前の洛陽の女兒に映ず、○歌舞烏雀の二句を以て、桑田の海と爲るは、信に虛ならざるを見るべきなり、

【評】馬詩數首。變化可觀。此篇精鍊雄健。尤可取法。

高都護驄馬行　杜甫

安西都護胡青驄。聲價欻然來向東。此馬臨陣久無敵。與人一心成大功。『功成惠養隨所致。飄飄遠自流沙至。雄姿未受伏櫪恩。猛氣猶思戰場利。』跼蹐促蹄高如踣。鐵交河幾蹴層冰裂。五花散作雲滿身。萬里方看汗流血。『長安壯兒不敢騎。走過擊電傾城知。青絲絡首爲君老。何由却出橫門道。』

【註】史を按ずるに、高仙芝は、安西の副都護と爲る、天寶六載に、小勃律を平らけ、八載入朝す、

舊唐書に、貞觀中、安西の都護府を置く、于闐以西、波斯以東は、之れに隸す、胡青驄は、青毛色なり、○跼促。相馬經に、馬の跼は促らんことを欲す、蹄は高からんことを欲す、跼促るときは健なり、蹄高きときは、險峻に耐ふ、○交河は、今の西番、火州の地、○五花は、馬の色、○汗流血。漢書に、李廣利は、汗血馬を獲來る、○橫門道は、長安城北出の西頭第一門にして、西域に趨くの路なり、』此の馬は、西域に於て、功ありしもの、新に都護に隨ひて、京に入りたる者なり、詩は、此より意を着けたり、起四句は、先づ來歷を說き來り、欻然向東を以て、一詩の根と爲し、而して馬を說き、人を帶び、兼て都護を表す、功成の四句は、其新に到るを敍し、而して其格性を擬す、未伏櫪。猶思戰は、すべて新に到る上より摹想し出し來る、跼促の四句は、其骨相を寫し、仍ほ來路に就て情

を生ず、交河蹴氷は、彼の地に在りて、此の如かりしを想ふなり、萬里方汗は、此の長途を歷て疲れざるなり、末の四句は、復た其氣概に就き、其心志を推して曰く、此の擊電驚人の姿を以て、今は安養せられて退休せり、されども、豈に遂に出でて大功を建つることを忘れんやと、又來路より、一の出路を轉じ來る、其通套の語を作さゞること此の如し、其高邁卓絕にして、頭を低れて、人に傍ふことを、肯ぜざるの氣象を寓したるに至りては、讀むものは、自から領せん、

【評】全篇着眼仙骨、一句縹渺超忽、讀去讀來有出塵之懷。

送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白

杜甫

巢父掉頭不肯住、東將入海隨烟霧、詩卷長留天地間、釣竿欲拂珊瑚樹、深山大澤龍蛇遠、春寒野陰風景暮、蓬萊織女回龍車、指點虛無引歸路、自是君身有仙骨、世人那得知其故、惜君只欲苦死留、富貴何如草頭露、蔡侯靜者意有餘、清夜置酒臨前除、罷琴惆悵月照席、幾歲寄我空中書、南尋禹穴見李白、道甫問訊今何如。

【註】唐書に、巢父、字は弱翁、少して韓準、李白、裴政、張叔明、陶沔と、徂徠山に隱居し、竹溪の六逸と號す、○此の詩は、天寶中、京師に在りて作りたるものなり、

巢父は、太白一輩の人にして、其往く所の地、東海に近し、謂はゆる仙靈窟宅の處なり、故に超然出世の語を爲すなり、通首の旨趣は、君身仙骨の句に在り、○起四句は、一冒を作す、山澤龍蛇は、左傳の語を用ふと雖、實は暗に老子は猶

龍の意を用ひたり、此れ等の人は、定めて應さに遠く引き去るべきなり、春寒風景は、行色を點綴せるなり、蓬萊織女は、卽仙人王女、意ふに、車を回らし指點して、仙侶は導引するならん、憐君苦留は、正さに仙骨を知らざる世人を指す、此處は、反筆を以て頓住したり、蔡侯は、餞を設けたる人、罷琴惆悵は、自己送行の感に搭入す、空中の書は、其道を得て招かれんことを冀ふなり、泛然たる通信に止まるに非ず、故に幾歳といふ、李白に呈するは、只一點のみ、今何如とは、此より前に、李白に贈りたる詩に、一は則拾瑤草と云ひ、再は則就丹砂と云ふ、此に至り、其果して得たるや否やを問ふなり、亦平安の套語に止るにあらず、正さに全篇の、孔に贈る意と、打して一片と成すなり、

○詩卷云々、巢父は、徂徠集あり、世に行はる、○左傳に、深山大澤、實に龍蛇を生ず、○空中書。梁の高僧傳に、史宗は何れの許の人なるを知らず、常に廣陵の白土埭に在り、一道人あり、少兒を取り、一山に至る、山上の人、書を作り、小兒に付す、其れをして、杖を捉らしめ、飄然として去る、或は足下に波浪の聲あるを聞く、送りて白土埭に至る、史宗書を開き、大に驚て曰く、汝何ぞ蓬萊道人の書を得たるやと、禹穴。此の時、李白は吳越地方に遊びたるなり、

【評】卓犖雄偉。抑揚頓挫。詔謂以下數句。是一篇着色處。結末感慨更妙。

丹青引贈曹將軍霸　杜甫

將軍魏武之子孫。於今爲庶爲清門。英雄割據雖已矣。文采風流今尚存。學書初學衛夫人。但恨無過王右軍。丹青不知老將至。富貴於我如浮雲。開元之中嘗引見。承恩數上南薰殿。凌烟功臣少顏色。將軍下筆開生面。良相頭上進賢冠。猛將腰間大羽箭。褒公鄂公毛髮動。英姿颯

爽來酣戰』先帝天馬玉花驄畫工如山貌不同
是日牽來赤墀下迥立閶闔生長風詔謂將軍
拂絹素意匠慘澹經營中斯須九重眞龍出一
洗萬古凡馬空玉花却在御榻上榻上庭前屹
相向至尊含笑催賜金圉人太僕皆惆悵弟子
韓幹早入室亦能畫馬窮殊相幹惟畫肉不畫
骨忍使驊騮氣凋喪將軍善畫蓋有神必逢佳
士亦寫眞即今漂泊干戈際屢貌尋常行路人
途窮反遭俗眼白世上未有如公貧但看古來
盛名下終日坎壈纏其身

【註】名畫記に曹霸は曹髦の後なり、髦の畫、魏の代に稱せらる、霸は開元中に在りて、已に名を得たり、天寶の末、毎に詔して御馬及び功臣を畫かしむ、官は左武衛將軍に至る、○書斷に、衛夫人名は鑠、字は茂猗、汝陰太守李矩の妻なり、隸書尤も善し、鍾公に規矩す、王右軍少きとき、嘗て之を師とす、○凌烟。貞觀十七年、功臣を凌烟閣に圖す、○進賢冠、は冠名なり、○褒公鄂公。舊唐書に、凌烟の功臣二十四人、開府儀同三司鄂國公尉遲敬德第七、故輔國大將軍揚州都督褒國忠壯公段志玄第十、○先帝は、玄宗を云ふ、○惆悵は、言ふは、畫馬は眞馬の寵を奪へる故に、御者等は惆悵するなり、○韓幹。名畫記に、韓幹は大梁の人、善く人物を寫貌す、尤も鞍馬に工なり、初め曹霸を師とし、後獨自から擅にす、玄宗大馬を好む、西域に歳々獻ずる者あり、幹に命じて、悉く其駿を圖せしむ、則玉花驄、照夜白等あり、

此の詩を讀むものは、贈曹將軍霸の五字を忘るゝ勿れ、通篇感慨淋漓、都べ

て此の五字より出で來るなり、而して其盛其衰は、總べて畫の上より見はす、故に丹青の引といふなり、

起四句は、兩層の抑揚あり、總べて下文四段の爲めに地を作す、於今爲庶は、末段の漂泊途窮に照し到る、文采尚存は、中三段の、奉詔作畫を照し起す、而して學書の二句は、乃ち陪筆なり、丹青の二句は、乃ち點筆なり、中三段は、是れ昔の盛を追ひ、末の一段は、是れ今の衰を歎ず、韓幹を以て襯筆を作すは、韓を貶するにあらず、是れ乃ち拿題法なり、而して三段中に於て、人を略し馬を詳にす、章法相間はる、以上は、其盛を總べていひ、以て篇首の文采風流の句に應ず、末段畫善の句は、總筆を以て、前を束ね、佳士の句は、補筆を以て下を引く、須らく知るべし將軍の畫は前の二項に止まらず、故に寫佳士を以て、之を補ふ、其前は只詔を奉じて作りし所の者を鋪排す、正さに此處の、屢貌萃常と相照耀し、今昔の時を異にし喧寂の頓に判るゝを見はす、此れは則曹將軍に贈る、感遇の本旨なり、結聯は、又推開して、解譬の語を作す、而して慨を寄すること轉よ深し、此の段は、其衰を極言し、篇首の於今爲庶の處と應ず、其命意作法、蓋此の如し、

短歌行贈王郎司直　杜甫

王郎酒酣拔劍斫地、歌莫哀。我能拔爾抑塞磊落之奇才。豫章翻風白日動。鯨魚跋浪滄溟開。且脫劍佩休徘徊。西得諸侯棹錦水。欲向何門問跋涉。仲宣樓頭春色深。青眼高歌望吾子。眼中之人吾老矣。

【評】通篇豪氣激越。上下各五句。並用單句。收之頓跌有勢。

【註】王郎將さに西蜀に遊びて、諸侯に干さんとす、酒酣にして哀歌す、杜子は乃ち筵に當り、此の詩を贈りたるなり、○首句の莫哀の二字は另に讀むべし、

地を斫りて歌ふは、哀情發するなり、故に之れに、哀むこと莫れと勸むるなり、爾の才は絕奇なり、我能く之を拔んとなり、白日滄溟は、當時の勢あるものに喩へたり、白日爲に動き、滄溟爲めに開くは、正さに其必拔かるゝ處、徘徊は卽哀歌の態なり、脫といひ、休といふは、卽哀む莫れの意、重言して以て之を勸むるなり、西得の二句は、蜀に赴くを點す、錦水に棹さすは、其壯遊を稱するなり、何れの門に向ふは、其地を擇ぶを勗めしむるなり、仲宣の句は、地を點し、時を點す、王に在りては、則之れに莫哀を勸め、我に在りては、則高歌して以て望む、照耀生動の趣あり、結尾は、又單詞を以て、之を鼓勵し、以爲らく、眼中の人にして、吾の如きものは、則老て用ひる所無きのみと、

○司直は東宮の官にして、彈劾糾擧を掌どる○此詩は、蓋大曆三年、杜子荆南に在り、時に王郎、蜀中節度の幕官と爲り、將さに、成都に赴んとする時、杜と相別れたるなるべし、○豫章は、大木名材なり、○諏は足を進めて攬み取るなり、○珠履。春申君の上客、皆珠履を躡む、○仲宣樓。後漢の王粲、字は仲宣、亂を荆州に避け、登樓の賦を作る、荆州當陽縣の城樓を仲宣樓と名づく、○青眼。相望むは、知己の情なり、

【評】悲壯沈鬱。縱橫豪宕。前無古人。後未見來者。

兵車行　杜甫

車轔轔馬蕭蕭。行人弓箭各在腰。耶孃妻子走相送。塵埃不見咸陽橋。牽衣頓足攔道哭。哭聲直上干雲霄。道旁過者問行人。行人但云點行頻。或從十五北防河。便至四十西營田。去時里正與裹頭。歸來頭白還戍邊。邊庭流血成海水。武皇開邊意未已。君不聞漢家山東二百州。千

邨萬落生荆杞。縱有健婦把鋤犂。禾生隴畝無
東西。況復秦兵耐苦戰。被驅不異犬與雞。長者
雖有問。役夫敢伸恨。且如今年冬。未休關西卒。
縣官急索租。租稅從何出。信知生男惡。反是生
女好。生女猶得嫁比鄰。生男埋沒隨百草。君不
見青海頭。古來白骨無人收。新鬼煩寃。舊鬼哭。
天陰雨濕聲啾啾。

【註】古樂府は、謂はれ無くして作るものにあらず、此の篇は、明皇が、兵を吐蕃に用ひ、人民は行役に苦めるが爲めに、作りたるものなり、是れを樂府の創體と爲す、

首段は、送別悲楚の狀を叙す、乃ち紀事なり、下の二段は、征夫苦役の情を述ぶ、乃ち紀言なり、

道旁の一段は、點行頻の三字を出し、一詩の眼と爲す、又開邊未已の四字を掲げ、詩を作るの旨を見はす、然れども、此の段は從前を歴述し、慘苦を指陳するなり、

長者より以下、末に至るまで、纔に時事に入り來る、今冬の二句は、乃ち是れ本題の正面なり、末は則現在行役の苦を慨歎す、蓋人主が、既往を鑒みて、將來を憫まんことを欲し、征夫の苦語を假り、當年の黷武を諷す、此れ三百篇の遺意なり、兩び、君不見や、君不見やと呼びたり、其人主を喚び醒すこと、激切といふべし、

○開元十五年、吐蕃が、邊害を爲すを以て、關中の兵萬人を徵し、臨洮に集めて、防秋せしむ、○唐の食貨志に、軍府を開き、以て要衝を捍ぎ、隙地に因り、以て營田を置き、警あるときは、軍を以て、役を助く、云々、○武皇云々、此は漢の

武帝に託し、以て諷するなり、○青海は、周圍八九百里、吐谷渾に在り、先後、吐蕃と戰ひたるは、青海の西に在るなり、

戲題王宰畫山水圖歌　杜甫

十日畫一水。五日畫一石。能事不受相促迫。王宰始肯留眞蹟。壯哉崐崙方壺圖。挂君高堂之素壁。巴陵洞庭日本東。赤岸水與銀河通。中有雲氣隨飛龍。舟子漁人入浦溆。山木盡亞洪濤風。尤工遠勢古莫比。咫尺應須論萬里。焉得並州快剪刀。剪取吳淞半江水。

【評】雲烟繚繞。筆墨有飛動之勢。

【評】此篇。從楚騷脫化來。變幻離奇。卓詭怪

【註】王宰は、蜀中の人、多く蜀山を畫く○崑崙は、西極に在り、方壺は海東にあり、謂はゆる三神山の一なり、○赤岸山の南は、江中に臨むと云ふ、○索靖は、顧愷之の畫を見て、欣然として、曰く恨むらくは、並州の快剪刀を帶び來りて、松江半幅の紋練を剪り、歸り去らざることを、

此の詩、起首の六句は、題を出す、先づ畫品を推し、次に圖名を落す、中の五句は、畫を敍する正文、卽上に謂はゆる壯哉、下に謂はゆる遠勢なり、本と水勢を寫す、兼ねて風勢を帶び、筆墨は生動す、末の四句は、咏歎して、以て前文を束ぬ、焉得とは、猶何處より得來ると云ふが如し、言ふは、此は復た筆墨の技にあらず、直ちに是れ、快剪刀を覓め得て、江水を剪り來りしなりとぞ、

夢遊天姥吟別東魯諸公　李白

海客談瀛洲。煙濤微茫信難求。越人語天姥。雲霞明滅或可觀。天姥連天向天橫。勢拔五嶽掩

偉。夢境恍惚。而其句法則長短錯落。波瀾洶湧。使讀者魂悸魄動。忽驚忽喜。有御天風伍飛仙之懷。

赤城。天台四萬八千丈。對此欲倒東南傾。我欲因之夢吳越。一夜飛渡鏡湖月。湖月照我影。送我至剡溪。謝公宿處今猶在。綠水蕩漾清猿啼。脚著謝公屐。身登青雲梯。半壁見海日。空中聞天雞。千巖萬轉路不定。迷花倚石忽已暝。熊咆龍吟殷巖泉。慄深林兮驚層巔。雲青々兮欲雨。水澹々兮生煙。列缺霹靂。邱巒崩摧。洞天石扇。訇然中開。青冥浩蕩不見底。日月照耀金銀臺。霓爲衣兮風爲馬。雲之君兮紛紛而來下。虎鼓瑟兮鸞廻車。仙之人兮列如麻。忽魂悸以魄動。恍驚起而長嗟。惟覺時之枕席。失向來之煙霞。世間行樂亦如此。古來萬事東流水。別君去兮何時還。且放白鹿青崖間。須行卽騎訪名山。安能摧眉折腰事權貴。使我不得開心顏。

【註】此篇は變幻離奇にして、方物すべからざるに似たり、然れども越人が、天姥の奇勝を語るによりて、之れを夢みる、夢によりて、世間の行樂も、亦此の如くなるを悟る、さて悟るによりて、別るゝなり、節次の相生ずること、絲毫も亂れず、但中間は、夢境を叙したるもの故に、雲烟迷離、摸捉すべからざるが如し、後人因りて、首無く尾無く、窈冥昏默等の評を下すのみ、

○一統志に、天姥峯は、台州天台縣に在り、西北は天台山と相對す、其峯は孤

峭、下は嵊縣に臨む、仰ぎ望めば、天表に在るが如し、○鑑湖、一に鏡湖と曰ふ、會稽縣の西南三十里にあり、故の南湖なり、○江南史に、謝靈運、山を尋ね、嶺に陟り、必幽峻巖嶂に造る、常に木屐を着け、山に上るときは、則ち前齒を去り、山を下るときは、其後齒を去る、○靈運の詩に、共登青雲梯、又暝抵刻中宿、明登天姥岑、高高入雲霓、還期那可尋、青雲梯は、山嶺高峻にして、青雲に入る處を謂ふ、○列缺は、天隙の電光を謂ふ、○傅玄の、吳楚歌に、雲爲車兮風爲馬、○白虎鼓瑟、蒼龍吹笙、は西京賦に見えたり、○眞人列如麻云々は、太平御覽に見えたり、○騎白鹿而容與は、楚詞に見ゆ、○擢眉は、首を低るゝなり、

雉帶箭

韓愈

字は退之、南陽の人、少して孤なり、刻苦して儒を學び、長じて六經百家に通ず、貞元八年、進士に擢でられ、四門博士に調せられ、監察御史に遷り、後中書舍人に進み、裴度が行軍司馬と爲り、蔡を伐つ、蔡平らぎ、刑部侍郎に遷り、上疏して佛骨を論ず、上怒り

潮州の刺史に貶す、後召され、國子祭酒に拜し、兵部侍郎に轉ず、長慶四年卒す、年五十七、謚して文と曰ふ、集四十卷あり、

原頭火燒靜兀兀。野雉畏鷹出復沒。將軍欲以巧伏人。盤馬彎弓惜不發。地形漸窄觀者多。雉驚弓滿勁箭加。衝人決起百餘尺。紅翎白鏃隨傾斜。將軍仰笑軍吏賀。五色離披馬前墮。

【評】精光奇采、燦爛煥發。李杜外別出一頭地。絕技絕技。

【註】此の詩は、韓子が、張建封の幕客たりし時の作にして、壯年、尤も思を凝らし、力を用ひたるものなり、昔人云ふ、將軍云々の二句は、限り無き神情、限り無き頓挫あり、蓋人に示すに、運筆作文の法を以てしたるものなり、其全首、波瀾委曲にして、物を寫すの妙は、其狀、目前に在るが如しと、信に然るなり、

山石

韓愈

山石犖确行徑微。黃昏到寺蝙蝠飛。昇堂坐榻
新雨足。芭蕉葉大支子肥。僧言古壁佛畫好。以
火來照所見稀。鋪牀拂席置羹飯。疎糲亦足飽
我飢。夜深靜臥百蟲絕。清月出嶺光入扉。天明
獨去無道路。出入高下窮煙霏。山紅澗碧紛爛
熳。時見松櫪皆十圍。當流赤足蹋澗石。水聲激
激風吹衣。人生如此自可樂。豈必局束爲人機。
嗟哉吾黨二三子。安得至老不更歸。

【註】此の詩は、韓子の本色に非ざるが如し、然れども刻畫せずして、自然に精

【評】一篇記遊山寺耳。而叙事有法。濃淡得宜。句法亦爽朗俊逸。讀去如身在其間者。

彩あり、意の到る處、筆之れに隨ふ、蓋文章の筆を運らし、之れを詩に用ひたるもの、宜なり、埋伏あり、映帶あり、過脈あり、頓挫あり、濃淡相讓るものあり、是れ固より尋常詩家の及ぶ能はざる所なり、

五言律

野望　王績

字は無功、絳州の人、王通の弟、隋の太樂中、六合の令と爲る、世亂るの後、官を解き、北山の東皐に遊び、書を著はし、自から東皐子と號す、高祖武德の初、門下省に待詔す、性酒を嗜み、五斗先生の傳を著はす、

東皐薄暮望。徙倚欲何依。樹樹皆秋色。山山惟
落暉。牧人驅犢返。獵馬帶禽歸。相顧無相識。長
歌懷采薇。

【評】欲何依三字呼出全旨。

【註】王績は、絳州の人、北山の東皐に隱居す、○東皐。澤曲を皐と爲す、○徙倚は、徘徊の意○采薇。此時は、隋唐革命の際なれば、暗に伯夷叔齊の意を寓す、

塞下曲　李白

塞虜乘秋下。天兵出漢家。將軍分虎竹。戰士臥龍沙。邊月隨弓影。胡霜拂劍華。玉關殊未入。少婦莫長嗟。

【註】樂府題なり○匈奴は、秋に至り、馬肥え弓勁きときは、犯し來りて塞に入るなり、○虎竹。漢の時、郡國に將を置き、銅虎符、竹枝符を爲せり、其半を分ちて、之れに與へ、兵を發する毎に、郡に至らしめ、符を合せ、乃ち發す、○龍沙。龍堆、沙漠の地なり、○邊月。月を見れば、持する所の弓に似たり、霜を見れば、劍

【評】一聯勁拔。

を拔きて、拂ひたるかと疑ふとの意なり、月に邊と云ひ、霜に胡と云ふ、影に隨ふと云ひ、華を拂ふと云ふなど、字々研鍊せざること無し、○玉關云々、入るとは、還りて玉門關に入るなり、此は班超が、生きて玉門關に入らんと言ひし語を用ひたるなり、少婦云々、言ふは、軍士は、殊に關門に入らざるも、やがて凱旋すべければ、少婦に、いつまでも、歎嗟するに及ばぬぞ、との意なるべし、

送友人入蜀　李白

見說蠶叢路。崎嶇不易行。山從人面起。雲傍馬頭生。芳樹籠秦棧。春流遶蜀城。升沈應已定。不必問君平。

【註】見說。見聞する所の辭なり、○蠶叢。古の蜀王の名なり○秦棧。秦より、蜀に至る山中の路は、艱險なるゆゑ、木を架して渡る、是れを棧道といふ○君平。

【評】巧狀蜀道之難。一結是安命之學。

漢の嚴君平は、成都の市に於て、卜筮を爲す、此の句は、其事を用ひ、友人に說くに、命に安んずるの意を以てせるなり、

題義公禪房　孟浩然

名は浩、襄陽の人、字を以て行ふ、少して節義を好み、喜で人の患難を振ふ、鹿門山に隱る、年四十にして、乃ち京師に遊び、意を玄宗に失ふ、因りて放たれ還る、詩三卷あり、

義公習禪寂。結宇依空林。戶外一峯秀。階前衆壑深。夕陽連雨足。空翠落庭陰。看取蓮花淨。方知不染心。

【註】戶外の一聯は、人と境と相應ず、〇夕陽の一聯の意、言ふは雨將さに霽れんとして猶下り、夕陽は、斜に雨の脚を照すゆゑに、雨は晴と接す、故に連なるといふ、〇空翠は、山氣なり、〇蓮花。佛經には、多く蓮を以て、心に喩ふ、

【評】起結。炤應緊嚴。

觀獵　王維

風勁角弓鳴。將軍獵渭城。草枯鷹眼疾。雪盡馬蹄輕。忽過新豐市。還歸細柳營。回看射鵰處。千里暮雲平。

【註】新豐は、縣の名なり、漢の高祖は、舊里に象どりて、此の邑を制し、實るに豐邑の民を以てす、故に名づけて新豐といふ、〇細柳營。漢の大將軍周亞夫は、軍營をして柳を樹ゑしむ、咸陽縣の西に在り、

【評】嚴整雄健。

房兵曹胡馬　杜甫

胡馬大宛名。鋒稜瘦骨成。竹批雙耳峻。風入四蹄輕。所向無空濶。眞堪託死生。驍騰有如此。萬

【評】驍騰。與胡馬相稱。

里可横行。

【註】房兵曹、諸衛府州に、各〻兵曹參軍あり、○大宛。漢の武帝の時、李廣利、大宛を伐ち、汗血馬を獲て來り、天馬の歌を作る○批は、刺に通ず、斜に削るを謂ふ、此の兩句は、迅く馳するさまを形容せるなり、○空濶。馳すること速にして、前に餘地無きを云ふ、○託死。劉玄德、劉牢之、などが、駿馬に騎して、急難を脱せるが如きを云ふ、○騰騰。雄猛の勢を云ふ、○横行の上に、此馬に騎しての數字ある、心もちにて解すべし、

破山寺後禪院　常建

常建　開元十五年の進士、大曆中、盱眙の尉と爲る、詩一卷あり、

清晨入古寺。初日照高林。曲徑通幽處。禪房花木深。山光悅鳥性。潭影空人心。萬籟此俱寂。惟聞鐘磬音。

【註】古寺は破山寺を云ふ。○曲徑の一聯は、寺後の禪院を言ふ。○萬籟は、人間の諸の喧しき聲を云ふ、

【評】一誦此詩。覺塵念頓消。

訪戴天山道士不遇　李白

犬吠水聲中。桃花帶雨濃。林深時見鹿。溪午不聞鐘。野竹分清靄。飛泉挂碧峰。無人知所去。愁倚兩三松。

【評】秀而雅。

重題鄭氏東亭　杜甫

華亭入翠微。秋日亂清暉。崩石欹山樹。晴蓮曳寫景如繪。

【評】一

結奇雋。

水衣紫鱗衝岸躍。蒼隼護巢歸。向晚尋征路。殘雲傍馬飛。

太湖石

白居易

字は樂天、幼にして讀書勤敏、他兒と異なり、五六歲にて聲韻を識る、十五詩賦に志ざし、二十七進士に擧げられ、甲科に拔萃す、貞元十九年、校書郎を授けられ、元和三年、左拾遺に除し、十五年中書舍人知制誥に除せられ、開成元年太子少傅となる、卒せし年七十五、集七十五卷あり、

【評】造句渾雅。描寫盡趣。

煙翠三秋色。波濤萬古痕。削成青玉片。截斷碧雲根。風氣通巖穴。苔紋護洞門。三峰具體小。應是華山孫。

送秘書晁監還日本　王維

積水不可極。安知滄海東。九州何處遠。萬里若乘空。向國唯看日。歸帆但信風。鰲身映天黑。魚眼射波紅。鄉樹扶桑外。主人孤島中。別離方異域。音信若爲通。

【評】雄渾豁大。用事典切。

【註】秘書晁監。即安部朝臣仲麻呂唐に事へて秘書監と爲り、姓を晁と改む、晁は朝に通ず、即ち朝臣の朝を取りて、姓と爲したるものなるべし、仲麻呂の留學生と爲り、唐に入りしは、靈龜二年にして、十六歲なりしと云ふ、少年の、外國に留學するものは注意すべきことなり、

○積水は、海をいふ、荀子に、積水而爲海と見ゆ、○九州。史記に、騶衍言ふ、中國の外に、又九州あり云々、○看日。言ふは、日出を以て、標的と爲すなり、

○鰲は、大龜なり○扶桑。此の木は、海東の國に生ず、因りて以て國の名と爲す、然れども、考ふべからず、多くは、以て日本のことゝ爲す、○主人。朝衡を指すなり、

七言律

黃鶴樓

崔顥

卞州の人、開元十一年の進士、才俊にして、行ひ無し、李邕其名を聞き、舍を虛うして之を邀ふ、顥詩を獻ず、首に云、十五嫁王昌、邕叱して曰、小兒不禮なりと、與に接せず、後司勳員外郎に終はる、

昔人已乘黃鶴去。此地空餘黃鶴樓。黃鶴一去不復返。白雲千載空悠悠。晴川歷歷漢陽樹。芳草萋萋鸚鵡洲。日暮鄉關何處是。烟波江上使人愁。

【註】黃鶴樓は武昌府城西南隅、黃鶴磯上に在り、世に傳ふ、仙人子安、黃鶴に乘じ、此を過ぐゝと、○乘黃鶴、一本には、乘白雲に作る、○鸚鵡洲は、鄂州の江中に在り、黃祖が、禰衡を殺したる處なり、衡嘗て鸚鵡賦を作る、故に害に遇ひたる地は、名を得たりと云ふ、○前の四句は、樓名の由來を叙し、後の四句は、感慨の情を寓す、○此の篇は、李太白も推服せる所なり、蓋當時登臨の際、高興流れ出で、一氣を以て、呵して成るもの、故に疎宕の氣、自から筆墨に溢ふる、彼の後人が、青を取り白に媲し、搆思巧妙、字々精切にして、而も意味は索然たるものに比するときは、仙凡の別あるなり、

【評】此篇及前首。

登金陵鳳凰臺

李白

鳳凰臺上鳳凰遊。鳳去臺空江自流。吳宮花草

格調森嚴。氣骨蒼勁。盛唐人本色在乎此。

埋幽徑。晉代衣冠成古丘。三山半落青天外。二水中分白鷺洲。總爲浮雲能蔽日。長安不見使人愁。

【註】金陵は、明の南京の應天府なり、楚の威王、其地に王氣あるに因り、金を埋めて之れを鎮す、故に名づく、三國の吳、東晉、宋、齊、梁、陳、並に此に都す、臺は江寧縣治の南に在り、宋の元嘉中に、鳳皇ありて山に集まる、因りて臺を山上に起し、以て嘉瑞を旌はす、李白黃鶴樓に登り、崔顥の詩に嘆服し、金陵に至り、此れを賦し、之れに擬すと云ふ、

三山は、金陵の西南に在り、三峯排列せり○落の字は、在の字と見るべし、此は字を用ふることの巧なり○白鷺洲。秦淮の水は、金陵に至り、分れて二支となり、一支は城に入り、一支は外を遶る、共に一洲を夾む、之れを白鷺と云ふ、○浮雲。讒邪の臣、上を蒙ふに喩ふ、陸賈の新語に、邪臣の賢を蔽ふは、猶浮雲の日月を障ふるがごとし、○使人愁。蓋逐客の感傷を寓したるものなり、使の字は、輕く用ひたるなり、

早朝大明宮呈兩省僚友　賈至

字は幼鄰、洛陽の人、父曾、開元の初、制誥を掌とる、至、明經の策に擢でられ、玄宗、起居舍人知制誥に拜す、肅宗登極す、至、策を撰し、藥を進む、帝曰く、先帝の誥命、乃父之れを爲す、今茲の命策、又爾之を爲す、兩朝の盛典卿の父子に出づ、盛なりと謂ふべし、大曆七年卒す、年五十五、集二十卷あり、

銀燭朝天紫陌長。禁城春色曉蒼蒼。千條弱柳垂青瑣。百囀流鶯遶建章。劍珮聲隨玉墀步。衣冠身惹御爐香。共沐恩波鳳池上。朝朝染翰侍君王。

【評】典重雅麗。如此首及次篇。亦是唐人擅長。

【註】大明宮は、即蓬萊宮なり○紫陌は、京都の衢を云ふ、天に紫微垣あり、人主の宮は、之に象どる、故に紫宮と云ひ、殿を紫宸と云ふ、○青瑣。宮門は、刻みて連瑣の文を爲し、而して之を青塗す、○建章は、漢の宮殿の名、今は借りて稱するなり、○玉墀。階上の土は、玉石を以て飾るなり、○鳳池。中書省を鳳凰池と稱す、晋の荀勗の傳に見ゆ、○翰は筆なり、中書舍人は、詔誥を掌どる、時に賈至は、中書舍人たりしなり、

和賈至舍人早朝大明宮之作

王維

絳幘雞人報曉籌。尚衣方進翠雲裘。九天閶闔開宮殿。萬國衣冠拜冕旒。日色纔臨仙掌動。香烟欲傍袞龍浮。朝罷須裁五色詔。珮聲歸到鳳池頭。

【註】絳幘雞人。夜漏未だ曉けざる三刻に、衛士は、朱雀門外に候し、絳幘を着けて、雞唱を傳ふ、即周禮の雞人なり、○曉籌。漏籌なり、○尚衣。凡そ天子の物を掌どるを尚と云ふ、唐制に、宮中には、尚衣、尚食、尚藥、等の官あり、○翠雲裘。宋玉の賦に、上翠雲之裘と見ゆ、○五色詔。鄴中記に、後趙王石虎、詔書に、五色の紙を用ひ、木鳳の口中に著けて、銜み出さしむ、云々、

望岳

杜甫

西岳崚嶒竦處尊。諸峰羅立如兒孫。安得仙人九節杖。拄到玉女洗頭盆。車箱入谷無歸路。箭括通天有一門。稍待西風涼冷後。高尋白帝問

【評】鬱茂蒼勁。頷聯有流動之妙。

眞源。

【註】西岳は華山なり、○九節杖。仙書に、楊羲君仙翁は、九節杖を拄へて、白龍を視る○洗頭盆。集仙錄に、明星玉女は、華山に居る、祠前の石臼を、玉女の洗頭盆と云ふ、水旱にも增減せず、○華山に車箱谷あり、○箭括は、峯名なり、○洞天記に、華山を太極總仙の天と名づく、白帝の治むる所なり、○此詩は、兩意あり、一は帝居の遠きを惜き、一は、身は仙人に從ひて隱れんと欲するなり、

【評】筆健氣雄。

恨別

杜甫

洛城一別四千里。胡騎長驅五六年。草木變衰行劍外。兵戈阻絕老江邊。思家步月清宵立。憶弟看雲白日眠。聞道河陽近乘勝。司徒急爲破幽燕。

【註】流離漂泊して、衣食も給せざるに、幽燕を搗くの快擧を說く、是れ謂はゆる、性に發し、忠孝に止まるもの、此の本領ありて、眞の詩人と謂ふべし、○通鑑に、上元元年、李光弼、檢校司徒と爲り、安太淸を懷州の城下に破り、四月又史思明を河陽西渚に破るとあり、

【評】忠悃惻怛。讀者皆泣。

左遷至藍關示姪孫湘

韓愈

一封朝奏九重天。夕貶潮州路八千。欲爲聖明除弊事。肯將衰朽惜殘年。雲橫秦嶺家何在。雪擁藍關馬不前。知汝遠來應有意。好收吾骨瘴江邊。

【註】佛骨の表を上つり、身は左遷せらるゝも、其文は萬古に傳へて朽ちず、而して此の詩も亦光彩煥發、前後照映す、嗚乎盛なるかな、

庾樓曉望　白居易

獨憑朱檻立凌晨。山色初明水色新。竹霧曉籠銜嶺月。蘋風暖送過江春。子城陰處猶殘雪。衙鼓聲前未有塵。三百年來庾樓上。曾經多少望鄉人。

江樓夕望招客　白居易

海天東望夕茫茫。山勢川形濶復長。燈火萬家城四畔。星河一道水中央。風吹古木晴天雨。月照平沙夏夜霜。能就江樓銷暑否。比君茅舍較清涼。

【評】立凌晨三字。喚起一篇。至七八大振。七律結尾。不可無此雄健之筆。

【評】兩聯壯麗奇雋。

五言絶

易水送別　駱賓王

義烏の人、七歲能く詩を賦す、武后の時、數〻上書して、事を言ふ、下されて臨海の丞に除せらる、怏々として樂まず、官を棄て去る、徐敬業兵を起すに及び、署して府屬と爲す、檄を天下に傳へて、后の罪狀を斥す、后讀みて、一抔之土未乾、六尺之孤安在の句に至り、乃ち矍然として曰く、誰か之を爲す、或賓王を以て對ふ、后曰く、宰相那ぞ此の人を失ふを得ると、徐、敗るに及び、賓王亡命して、之く所を知らず、集十卷あり、

此地別燕丹壯士髮衝冠昔時人已沒今日水猶寒

【評】筆鋒鋭利、與題相稱。

【註】此は題を設けて、荆軻を詠じたるものなり、末尾に、一の寒の字を押し、全篇皆振ふ、

鹿砦　王維

空山不見人但聞人語響返景入深林復照青苔上

【評】有無變幻中含妙理

【註】鹿砦は、鹿を禦ぐ籬落を言ふ、王維の輞川別墅奇勝中の一なり、○輞川は、陝西藍田縣の西南、輞谷に在り、

詠史　高適

【評】其恩可感知己難遇今古皆然

高適　字は達夫、一の字は仲武、滄洲の人、有道の科に擧げられ、封丘の尉を授けらる、祿山反せる時、哥舒翰の四河の從事と爲り、左拾遺より、侍御史に遷り、諫議大夫に擢でられ、廣德中、左散騎常侍を以て、渤海侯に封ぜらる、年五十にして、始て詩を爲る、卽工なり、一篇を吟ずるごとに、好事者卽ち傳布す、集十卷あり、

倘有綈袍贈應憐范叔寒不知天下士猶作布衣看

平蕃曲　劉長卿

劉長卿　字は文房、河間の人、開元二十一年の進士、至德中、監察御史と爲り、隨州の刺史に終はる、集十卷あり

渺渺戍烟孤茫茫塞草枯隴頭那用閉萬里不防胡

【評】二首是唐凱旋曲直寫實況見平蕃之績

其二

絶漠大軍還平沙獨戍閒空留一片石萬古在燕山

和張僕射塞下曲　盧綸

字は允言、河中の人、大曆の初、進士に擧げられ、第せず、後禁中に召見せらる、時に韓翃等十人と、皆詩名あり、大曆の十才子と號す、集十卷あり、

【評】雄壯。

月黑鴈飛高單于遠遁逃欲將輕騎逐大雪滿弓刀

襄陽曲　李白

【評】明雋。

峴山臨漢江水綠沙如雪上有墮淚碑青苔久磨滅峴山有羊祜碑人呼曰墮淚碑

晚望　白居易

【評】高懷逸趣。

江上寒角動沙洲夕鳥還獨在高亭上西南望遠山

江雪　柳宗元

字は子厚、河東の人、貞元九年、博學宏詞の科に擧げられ、校書郎を授かり、監察御史に累遷し、禮部員外郎に擢でらる、王叔文政を得、內禁に引き入れ、與に事を計る、叔文敗れ、坐して永州の司戶に貶せらる、元和十年、柳州の刺史に徙り、官に卒す、集あり、行はる、

千山鳥飛絶。萬徑人蹤滅。孤舟蓑笠翁。獨釣寒江雪。

【評】清絶入神。

七言絶

涼州詞

王翰

學ばず子羽、晉陽の人、少して豪逸、進士第に擢でられ、昌樂の尉に調せらる、後に正字と爲る、集十卷あり、

葡萄美酒夜光杯。欲飲琵琶馬上催。醉臥沙場君莫笑。古來征戰幾人回。

【註】樂苑に、涼州宮詞の曲は、開元中、西涼府都督郭知運の進めたる所なり、

【評】醉中卽眞情所發。悲壯感慨。

黃鶴樓送孟浩然之廣陵　李白

故人西辭黃鶴樓。烟花三月下揚州。孤帆遠影碧空盡。唯見長江天際流。廣陵郡在揚州。屬淮南道。

【評】造句壯偉。言景而情在其中。

陪族叔刑部侍郎及中書舍人賈至遊洞庭湖　李白

洞庭西望楚江分。水盡南天不見雲。日落長沙秋色遠。不知何處弔湘君。

【註】洞庭以西は、皆楚の地なり、○湘君は、舜の二妃にして、沅湘の間に溺死し、遂に湘水の神と爲りたりと云ふ、

【評】氣宇空豁。有吞大湖之勢。

望天門山　李白

天門中斷楚江開。碧水東流至北廻。兩岸青山相對出。孤帆一片日邊來。

【註】天門山は、大江を夾む、東を博望と曰ひ、西を梁山と曰ふ、對峙せること門の如し、○此の詩は、太白が、宣城より、金陵に下りたる時、曲江中より見たる所なり、

【評】直寫所見景。澗句健。

早發白帝城　李白

朝辭白帝彩雲間。千里江陵一日還。兩岸猿聲啼不住。輕舟已過萬重山。白帝城至江陵凡一千二百餘里云。

【評】信筆寫去。壯快無比。

蘇臺覽古　李白

舊苑荒臺楊柳新。菱歌清唱不勝春。只今惟有西江月。曾照吳王宮裡人。

越中懷古　李白

越王勾踐破吳歸。義士還家盡錦衣。宮女如花滿春殿。只今惟有鷓鴣飛。義士。一本作戰士。是。○鷓鴣。南方鳥也。

【註】覽古懷古。荒臺の新柳は、見るべきもの有り、故に覽古と曰ふ、戰士宮女、皆見るべからず、故に懷古と曰ふ、吳王夫差は、蘇州に都す、姑蘇臺を作り、又天池を作る、

【評】此首。前三句言今日之衰。落句想及昔日之盛。

【評】此首前三句。言昔日之盛。落句說今日之衰。作法變化如是。

上皇西巡南京歌　李白

誰道君王行路難。六龍西幸萬人歡。地轉錦江

【評】兩首回護玄

宗肅宗得好。是其得體處。

【評】風景中有無限感慨。

成渭水天廻玉壘作長安。
劍閣重關蜀北門。上皇歸馬若雲屯。少帝長安開紫極。雙懸日月照乾坤。

【註】天寶十五歲六月、安祿山京師を陷いる、明皇は蜀に出奔す、七月、肅宗、靈武に於て卽位し、明皇を尊びて、上皇と曰ふ、明年、上皇、蜀より歸る、因りて蜀郡を陞せて、南京と爲す、○玉壘は、山名なり、成都に在り、○渭水は、長安に在り、○紫極は、禁中を稱するなり、

江南逢李龜年。　杜甫

岐王宅裏尋常見。崔九堂前幾度聞。正是江南好風景。落花時節又逢君。

【評】二首。悲壯雄健。于鱗以秦時明月爲唐人絕句壓卷。

從軍行　王昌齡

字は少伯、江寧の人、開元十五年進士及第し、秘書郎に補し、汜水の尉に遷る、晩節細行を矜まず、龍標の尉に貶せらる、世亂を以て鄉に還り、刺史閭丘曉の爲めに殺さる、集五卷あり

青海長雲暗雪山。孤城遙望玉門關。黃沙百戰穿金甲。不破樓蘭終不還。
秦時明月漢時關。萬里長征人未還。但使龍城飛將在。不教胡馬度陰山。

【註】青海は、臨羌の西に在り、早禾海と名づく、北地にては、總て湖を名づけて、海と爲す、○雪山は、卽天山なり、○玉門關は、長安を去ること三千六百里、樓蘭は、國名なり、陽關を去ること千六百里、○龍城は、塞外に在り、○飛將

は、李廣を謂ふ、○陰山は、塞外の山なり、

山房春事　岑參

南陽の人、天寶中の進士、至德二載、大理評事に試られ、監察御史を攝す、杜甫之を薦め、左補闕に轉じ、侍御史に累遷す、出て嘉州の刺史と爲り、杜陵の山中に退居す、中原の多故に屬し、卒に蜀に於て死す、集八卷あり、

梁園日暮亂飛鴉。極目蕭條三兩家。庭樹不知人去盡。春來還發舊時花。

【註】史記に、梁の孝王の西苑、方二百里、園中に、雁池鶴洲あり、宮觀相連なること數十里、四方の豪傑を招延す云々、

題長安主人壁　張謂

張謂　字は正言、河南の人、天寶二年の進士第に登り、使を長沙に奉す、大曆の間、禮部侍郎と爲る、

【評】此詠梁園古蹟也。三四語意婉轉得妙。

世人結交須黃金。黃金不多交不深。縱令然諾暫相許。終是悠悠行路心。

江南行　張潮

張潮　潤州曲阿の人、仕へず、

茨菰葉爛別西灣。蓮子花開猶未還。妾夢不離江上水。人傳郎在鳳凰山。

渡桑乾　賈島

賈島　字は浪仙、范陽の人、連りに文場に敗れ、遂に浮屠と爲る、名は無本、東都に來る、韓愈其れに文を爲くることを敎ふ、浮屠を去り、進士に擧げらる、大中の末に、長江の主簿と爲る、長江集十卷あり、

【評】當面痛罵。快絕快絕。

【評】幽閑貞靜。爲婦德之正。情辭婉約。自然感讀者。

【評】久客思レ郷實況實情。

客舍幷州已十霜。歸心日夜憶咸陽。無端更渡桑乾水。却望幷州是故郷。

【註】太原府は、本と幷州なり、開元十九年に府と爲す、○十霜は、十年を云ふ、○桑乾河は、山西大同府城の南六十里に在り、

楓橋夜泊

張繼

字は懿孫、兗州の人天寶十二年の進士第に登り、大層の末、檢校戸部員外郎を授けらる、詩一卷あり、

【評】倦夜情況。躍于文字之外。

月落烏啼霜滿天。江楓漁火對愁眠。姑蘇城外寒山寺。夜半鐘聲到客船。

【註】楓橋は、蘇州吳縣の西十里に在り、楓樹あり、故に名づく、○寒山寺は、寒山拾得の遊びたる所なり、

塞下曲二首

張仲素

字は繪之、元和中、翰林學士と爲る、

【評】雄猛之氣。横逸行間。

三戍漁陽再度遼。騂弓在臂箭横腰。匈奴似欲知名姓。休傍陰山更射鵰。

朔雪飄飄開雁門。平沙歷亂捲蓬根。功名恥計擒生數。直斬樓蘭報國恩。

【註】騂弓。詩經に騂々角弓と見ゆ、騂は赤なり○陰山は塞外に在り單于の依阻する所なり○射鵰。此は斛斯光の事を用ひたるなり、卽第二句に應ず、言ふは、射鵰の技術を見はして、渠れをして窺ひ識らしむること勿れと、北史に、斛斯光、嘗て一大禽を射る、形は車輪の如くにて下る、乃ち雕なり、○雁門は、太原府代州の北に、雁門關あるなり、

【評】當酒籌三字。喚出後半十四字。

【評】著想奇警。中有深厚之意。尤佳。

同李十一醉憶元九　白居易

春來無計破春愁。醉折花枝當酒籌。忽憶故人天涯去。計程今日到梁州。

王昭君　白居易

漢節却回憑寄語。黃金何日贖蛾眉。君王若問妾顏色。莫道不如宮裏時。

【註】西京雜記に、元帝の後宮既に多し、乃ち畫工をして、形を圖せしめ、圖を按じて、召して之を幸す、諸宮人、皆畫工に賂ふ、獨王嬙は肯ぜず、匈奴、美人を求めて、閼氏と爲さんとす、上、圖を按じ昭君を以て行かしむ、行くに及び、召見す、貌は後宮の第一たり、上、大に驚き、之を留めんと欲す、而して信を失ふことを難かり、終に之れを遣る、

送考功崔郎中赴闕　白居易

稱意新官又少年。秋涼身健好朝天。青雲上了無多路。却要徐驅穩著鞭。

江村即事　司空曙

【評】新進有爲之士。可以書諸紳。

【評】工穩妥帖。韻趣可掬。

司空曙　字は文明、廣平の人、進士の第に登る、貞元の初、水部郎中と爲り、虞部郎中に終はる、集二卷あり

罷釣歸來不繫船。江村月落正堪眠。縱然一夜風吹去。只在蘆花淺水邊。

石頭城　劉禹錫

【評】山河不異。英雄何在。

【評】王敬美以王翰葡萄美酒。及此篇。爲唐絶壓卷。

字は夢得、中山の人、貞元九年の進士、博學宏詞の科に登り、監察御史と爲る、王叔文と交はる、叔文敗れて、朗州の司馬に貶せらる、後和州に徙り、裴度の薦を以て、翰林學士と爲り、太子賓客に遷り、檢校禮部尚書を以て卒す、樂天常に推して詩豪と爲す、集四十卷あり、

劉禹錫

山圍故國周遭在。潮拍空城寂寞回。淮水東邊舊時月。夜深還過女牆來。

涼州詞

王之渙

井州の人、少して俠氣あり、中年節を折り、文を工にす、王昌齡、高適、等と爾汝の交を爲す、

黄河遠上白雲間。一片孤城萬仞山。羌笛何須怨楊柳。春光不度玉門關。

【評】狀景精妙。一結不說破。尤妙。

【註】遠上るは、上流を謂ふなり、○楊柳は、折楊柳の曲をいふ、○春光は、玉關を過ぎざれば、則其寒きこと知るべし、何ぞ怨に任ずるの柳あるを得んや、吹くと言はずして、怨むと言ひしは、其意深婉なり、

十五夜望月

王建

字は仲初、潁川の人、大曆十年の進士、太和中、陝州司馬と爲る、韓愈張籍と時を同くす、而して尤相友とし善くす、工に樂府歌行を爲くる、思遠く格幽なり、詩集十卷あり、

中庭地白樹栖鴉。冷露無聲濕桂花。今夜月明人盡望。不知秋思在誰家。

歸雁

錢起

字は仲文、吳興の人、天寶十年及第し、秘書郎を授けられ、考功郎中に終はる、郎士元と、興に詩を以て名あり、士林之れが爲めに語して曰く、前に沈宋あり、後に錢郎ありと、集二十卷あり、

【評】此詩、以問答體出之、用詞清麗、運思奇幻。

【評】一誦此詩、二子交情可想。

瀟湘何事等閒回、水綠沙明兩岸苔。二十五絃彈夜月、不勝清怨卻飛來。

【註】雁は、衡陽に至りて回るなり○此の詩は、瑟に、歸雁操あるを以て、湘妃の靈に託して、之れを言ひたるものなり、○前半は問、後半は答なり、

聞白樂天左降江州司馬　元稹

元稹　字は微之、河南の人、太和の間、尚書右丞と爲り、卒す、元氏長慶集百卷あり、

殘燈無焰影幢幢、此夕聞君謫九江。垂死病中驚坐起、暗風吹雨入寒窗。

【註】凡そ官は、陞るを以て右職と爲す、降るを以て左遷と爲す、○江州潯陽郡は、本と九江郡なり、後に九江府と爲す、○幢々は、明ならざる貌なり、

【評】有韻有情、妙趣自然。

【評】無限傷心、妙在不說破。

暮春歸故山草堂　錢起

谷口春殘黃鳥稀、辛夷花盡杏花飛。始憐幽竹山窗下、不改清陰待我歸。

上汝州郡樓　李益

李益　字は君虞、隴西姑藏の人、大曆四年の登第、後多く兵間に在り、憲宗の時、秘書少監と爲り、太子賓客に遷り、禮部尚書を以て致仕して卒す、集二卷あり、

黃昏鼓角似邊州、三十年前上此樓。今日山川對垂淚、傷心不獨爲悲秋。

從秦城回再題武關　李涉

李涉　字は清溪、洛陽の人、李渤の兄、初廬山に隱る、憲宗の時、太子の通事舍人と爲り、太和中、大學博士と爲り、自から月溪子と號す、詩一卷、

遠別秦城萬里遊。亂山高下入商州。關門不鎖寒溪水。一夜潺湲送客愁。

【註】武關は商州に在り、漢の高祖は、武關より秦に攻め入りしなり、○商州に、七盤十二繞あり、其地は險隘なり、○此の時李涉は「夷陵の宰に謫せられ、峽中に躑躅せること十年、後赦に遇ひて、還るを得たり、

【評】清越之音。一誦解頤。

城西訪友人別墅　雍陶

雍陶　字は國鈞、成都の人、太和八年の進士、大中の間、國子毛詩博士より、出て簡州の刺史と爲る、詩十卷あり、

【評】風韻天成。

澧水橋西小路斜。日高猶未到君家。村園門巷多相似。處處春風枳殼花。

夜雨寄北　李商隱

李商隱　字は義山、懷川の人、文宗の開成二年、進士第に登る、弘農の尉に謫せられ、後檢校吏部員外郎と爲る、滎陽に歸り卒す、集四十卷あり、商隱文章を爲くる、瑰邁奇古、律詩に長ず、詠史尤も精し、溫庭筠等と、三十六體と號し、亦號して西崑體と曰ふ、

君問歸期未有期。巴山夜雨漲秋池。何當共剪西窗燭。却話巴山夜雨時。蓋爲東蜀節度判官時寄內。

【評】情思綿連。一轉廻想。及他日事。何等妙構。辭盡而意不盡。

華清宮　崔魯

崔魯　僖宗の廣明の進士、無机詩四卷あり、

草遮回磴絶鳴鑾。雲樹深深碧殿寒。明月自來還自去。更無人倚玉欄干。

【評】風調絶佳。意思精工。

【註】華清宮は、即驪山溫泉宮なり、天寶六年、玄宗驪山に往き、名を華清と改む、○楊妃別傳に、明皇、貴妃と、夜、玉欄に倚り、自から誓ふ、世々夫婦と爲んと、

泊秦淮　杜牧

杜牧　字は牧之、京兆の人、善く文を屬す、太和二年、進士に擧げられ、殿中侍御史に拜し、中書舍人に遷り、剛直にして奇節あり、敢て大事を論列す、時に援くるもの無し、卒する年、五十、自から墓誌を爲くり、悉く爲りし所の文を取り、之を焚く、樊川集二十卷あり、牧の詩情豪邁、人號して小杜と爲す、

烟籠寒水月籠沙。夜泊秦淮近酒家。商女不知亡國恨。隔江猶唱後庭花。

【評】聲響悠揚。神韻獨絶。

【註】陳の後主、酒に荒み、玉樹後庭華の曲を作る、聞くもの泣下る、後に隋の爲めに滅さる、商女は亡國の音なることを知らざるなり、

經汾陽舊宅　趙嘏

趙嘏　字は承祐、山陽の人、會昌三年の進士、大中の間、仕へて渭南の尉に至る、渭南集三卷、又編年詩二卷あり、

門前不改舊山河。破虜曾輕馬伏波。今日獨經歌舞地。古槐疎冷夕陽多。

【評】俯仰今昔。寓情于景。

【註】郭子儀は、安祿山、史思明等の亂を平らげ、汾陽王に封ぜらる、伏波將軍馬援も、比するに足らざるなり、

【評】託悲慨於麗詞。婉轉縣連。所謂可歌可哭者。

隴西行　陳陶

字は嵩伯、潯陽の人、武宣の間、自から三教布衣と稱す、遊學を好み、天文を善くし、雅頌に長す、文錄十卷あり、

誓掃匈奴不顧身。五千貂錦喪胡塵。可憐無定河邊骨。猶是春閨夢裏人。

【註】無定河、一名は、奢延水、又銀水と名づく、後人、潰沙急流にして、深淺定まらざるに因り、今の名に更む、延安府の青澗縣に在り、南は黃河に入る、

【評】無窮悲憤聲

己亥歲　曹松

字は夢徵、衢陽の人、賈島に學び、詩を爲くる、昭宗の天復の初、及第す、王希羽、劉象、柯榮、鄭希彥、榜を同くす、皆年七十餘、時に五老榜と號す、各校書郎を授く、集三卷あり、

澤國江山入戰圖。生民何計樂樵蘇。憑君莫話封侯事。一將功成萬骨枯。

【註】唐の僖宗の乾符六年、己亥なり、是の年、元を廣明と改む、○澤國は、江南地方、卽黃巢が掠めたる、荆楚、江淮、浙右等の處を指す、○樵蘇は、きこり、草かりを云ふ、史記に、樵蘇後爨と見ゆ、

調激楚。

【評】句格雄渾○感意氣則進不憚艱險不得志則退伍布衣是丈夫平生所期矣。

閬鄉寓居　吳融

六載抽毫侍禁闈。不堪多病決然歸。五陵年少如相問。阿對泉頭一布衣。

【註】閬鄉は、虢州に屬す、按ずるに、吳融字は子華、本と越州の人なり、○新唐書に傳あり、昭宗の時、翰林承旨と爲る○五陵は、長陵、安陵、陽陵、茂陵、平陵、を言ふ、○阿對泉は、是れ楊伯起の家童、嘗て泉を引き、蔬に灌ぎし處、泉は今に至り、尙在りと云ふ、

今茲七月避暑於群馬縣香山浴湯泉餘暇校定曾所編唐詩雋既而印刷告成因錄山樓所得詩一首以塡餘白固不免狗尾續貂也明治四十四年八月中澣土屋弘

勝區開山腹。流望足怡目。夜來涼雨過。前峯綠可掬。遊禽伴且鳴。懶雲留還宿。澡泉有餘閑。舊書耽校讀。園庭發幽花。斷續遞清馥。此間聊考槃。擬學碩人軸。

唐詩雋 終

詩論鈔 附載

尙書は卽ち書經。毛詩は詩經なり。

總論

費天承曰く。尙書に云ふ。詩は志を言ひ。歌は言を永くし。律は聲を和すと。而して子夏の毛詩の序には則曰く。詩は志の之く所なり。心に在るを志と爲し。言に發するを詩と爲す。情は中に動きて。言に形はる。之れを言ひて足らず。故に之れを詠歌す。之れを詠歌して足らず。之れを嗟嘆して足らず。故に之れを詠歌して足らず。故に手の之れを舞ひ。足の之れを踏むことを知らずと。嗚呼。詩の旨。寧ぞ此れに外なること有んや。然り而して。千古易はらざる者は。詩の旨なり。而して變せざるものは。詩の體なり。故に漢魏の詩は。商周に同じからず。而して唐宋の詩は。又

風は國風なり。雅は大雅小雅なり。頌は商頌。周頌。魯頌。の類なり。

漢魏に同じからざるなり。

胡元瑞曰く。風と曰ひ。雅と曰ひ。頌と曰ふは。三代の音なり。歌と曰ひ。行と曰ひ。吟と曰ひ。操と曰ひ。詞と曰ひ。曲と曰ひ。謠と曰ひ。諺と曰ふは。唐人の音なり。律と曰ひ。排律と曰ひ。絶句と曰ふは。唐人の音なり。詩は唐に至りて格備はる。絶に至りて體窮まる。故に宋人は。變じて詞に之かざるを得ず。元人は。變じて曲に之かざるを得ず。

樂府

徐伯魯曰く。樂府は。樂官肄習の樂章なり。劉勰曰はく。詩は樂の心と爲す。聲は樂の體と爲す。體は聲に在り。瞽師は務めて其器を調ふ。心は詩に在り。君子宜しく其文を正しくすべしと。

李白。杜甫。高適。岑參。

伯魯曰く。樂府の命題は。其名稱一ならず。蓋琴曲よりの外。其情を放ちて長言し。雜にして方無きを歌と曰ひ。步驟馳騁し。疏にして滯らざるを行と曰ひ。之れを兼ぬるを歌行と曰ふ。事の本末先後を述べ。序し以て其意を抽くものあり。之れを引と曰ふ。高下短長。委曲に情を盡くし。以て其微を道ふ者を曲と曰ふ。吁嗟慨嘆し。悲憂深思し。以て其鬱を伸ぶるものを吟と曰ふ。其辭を措くの意に因りて。詞と曰ひ。其篇に命ずるの意に本づきて。篇と曰ひ。發歌を唱と曰ひ。條理あるを調と曰ひ。憤りて怒らざるを怨と曰ひ。感じて言を發するを嘆と曰ふ。○梁陳よりして。樂府古詩。變じて律絶と爲る。唐人李杜高岑は。名づけて樂府と爲す。實は則歌行なり。此れより下りては。益〻卑庸怪麗に入りたり。

胡元瑞曰く。歌は曲調の總名なり。上古に原づく。行は歌中の一體にして。漢人より創れること明らけし。

五言古詩

徐伯魯曰く。五言古詩は。西漢の蘇武李陵に始まり。漢魏に汪洋し。晉宋に汗漫す。陳隋に至りては。古調絶えたり。唐初には。前代の弊を承けたりしも。幸に陳子昂あり。起りて之れを振はし。李杜王孟相繼ぎて起り出でたり。

胡應麟曰く。四言は簡質なれども。句短くして調未だ舒びず。七言は浮靡なり。文繁くして聲雜なり易し。繁簡の衷を折り。文質の要に居るものは。五言より尙なるは莫し。茲に兩漢以下。文人藝士。平生の精力は。咸斯の道に萃まるなり。

王孟は。王維。孟浩然なり。

椁音郭。

范椁曰く。五古の作法は。須らく筆を用ること矯健にして古意を含むことを要すべし。平仄に拘はり。穩順にして。律に近づくべからず。五言の長古は。其法四要あり。曰く分段。曰く過脈。曰く回照。曰く讃歎。是れなり。而して先づ分段を要す。句數は略〻均齊なるを要す。首段は是れ序子なり。一篇の意は。皆含みて其中に在り。以下一段一意とす。此れは雜亂を防ぐなり。次に。過句を要す之れを名づけて血脈と爲す。此の處は。兩句を用ひ。一は上を結び一は下を生ずるなり。三は回照を要す。此は十步に一回顧して。以て題面を照すを謂ふ。四は讃歎を用ふ。此は毎段に。一の消息の語を作し。以て之れを讃歎するなり。故に方さに甚だ迫促ならざるなり。以上の四法は。少陵の北征の一篇に備はる。

七言古詩

徐伯魯曰く。七言の沿起は。咸曰ふ漢武の栢梁に始まり。唐に至り。其體始て暢ぶ。其則たるや。聲長く字縱にして。以て文を成し易し。

胡應麟曰く。七言古は。鋪敍あり。開闔あり。風度あり。庸俗軟腐を忌む。須らく是れ波瀾開闔一波未だ平かならずして一波復た起るべし。

吳訥曰く。七言古詩は。句語渾雄にして。格局蒼古なることを貴ぶ。若し或は竊かに鏤刻して。以て巧と爲し。務めて喝喊して。以て豪と爲し。或は萎弱に流れ。或は纖麗に過るときは。則之れを失はん。

王士禎曰く。五七言古は。章法は同じからざること無し。但五言は。才氣を用ひて馳騁し得ず。七言は。則須らく。氣勢宏濶頓挫激昂して。大に開き。大に闔づべきのみ。

又曰く。七言古の換韻は。須らく平仄相間はることを要すべし。亦對仗を用ふべし。間〻律に似たる句あるも。亦妨げ無し。若し一韻到底の者ならば。斷じて雜ふるに律句を以てすべからず。蓋古詩は。音節を以て頓挫を爲す。音節は平仄より生ず。平仄、音節に合はざれは。句調豈に頓挫あらんや。

又曰く。七言古は。第五字を以て關振と爲す。猶ほ五言古は。第三字を以て關振と爲すが如し。(單句の第五字に。仄を用ふるときは。雙句の第五字に。平を用ふ。卽謂はゆる關振なり) 彼の俗に云ふ所の。一三五は論せずと云ふことは。惟以て近體に言ふべからざ

杜韓。杜子美。韓退之。をいふ。

るのみならず。而して亦以て古體にも言ふべからざるなり。(按ずるに。古詩は平仄を論せざるべからず。却て又指定すべからず。然れども。稍指すべきものあり。如し平韻を用ひたる詩ならば。則單句內。第五字は。須らく仄聲を用ひ。以て之れを抑ふべし。雙句內の第五字は。須らく平聲を用ひ。以て之れを揚ぐべし。如し仄韻を用ひたる詩ならば。卽此れに倣ひて。以て之れを反すべし。是の如くならば。則音節自から合ひて。句調も亦軟弱なること。律詩に似たるを致さゝるなり。此の法は。杜韓兩家を。細かに玩ぶときは。未だ必しも句句盡く然らずといへども。然れども此に出るもの。十に七八に居る。惟、數句一換韻の者は。未だ概論すべからざるのみ。)

近體律詩

沈宋。沈佺期と宋之問なり。

徐伯魯曰く。按ずるに。律詩は梁陳以下。聲律對偶の詩なり。詩は梁陳に至りて。儷句漸く多し。古詩と名づくと雖。已に律體を具す。唐興りて。沈宋の流。更に精錬を加へ。號して律詩と爲す。其後寢盛なり。古詩の高遠に及ばずと雖。然れども對偶音律も。亦文章の缺くべからざるものなり。其詩は。一二を起聯と名づけ。五六を頸聯と名づけ。三四を領聯と名づけ。七八を尾聯と名づけ。又發句と名づく。又落句と名づく。間〻變體あり。其三韻(五言律にして。六句に止まるもの。)は則五言中の別體なり。大抵律詩の作は。或は情に因り。以て景を寓し。或は景に因り。以て情を見はす。格調を以て主と爲し。意興を以て之れを經し。詞句を以て之れを緯す。渾厚を以て上と爲し。雅淡を以て之れに次ぐ。穠艶は又之れに次ぐ。若し其難易を論ずるときは。則對句は工なり

易し。結句は工なり難し。發句は尤も工なり難きなり。學者此れを知り。而して各ゝ其才を充つるときは。則盛唐の作は。復た今日に見ることを得べし。

高棅曰く。七言律詩は。又五言の變なり。唐以前に在りて。已に律調を肇めたりしも。唐初に至り。始て此の體を專にす。

徐伯魯曰く。律と云ふゆゑは。平仄を調へ。對偶に拘はること。法律の嚴なるが如きによるなり。

又曰く。律詩の作法は。前起二句(或は景を對して興起し。或は物を借りて比起し。或は題に就きて賦起す。)中對四句(二は景を言ひ。二は情を言ふ。)後結二句(或は題に就き繳足し。或は證を引き詠歎す。)此れは正格なり。

唐律に。各派あり。典麗精工。(陳子昂。杜審言。沈佺期。宋之問。の屬は是れなり。)清空閒遠(王維。孟浩然。儲光羲。韋應物。の類是れなり。)風華宕逸(李白の屬なり)沈雄悲壯(杜甫の屬なり。)

繳音灼。纏也。繳足は。結束の意なり。

排律

徐伯魯曰く。唐興り。始て此の體を專らにす。而して排律の名あり。布置に序あり。首尾貫通するを以て。上と爲す。

宋漫堂曰く。初唐の王揚盧駱倡へて排律を爲くり。陳杜沈宋之れを繼ぐ。大約。侍從遊宴應制の篇多きに居る。臺閣體と稱する所のものなり。

胡應麟曰く。盛唐の排律。宋延清、王摩詰、等の作は。眞に萬花の春、谷に入り。光景爛熳たるが如し。人をして。應接に暇あらず。賞玩して歸ることを忘れしむ。太白は、輕爽雄麗にして。明堂黼黻。冠

王。揚。盧。駱。は王翰。揚烱。盧照隣。駱賓王。を云ふ。陳杜は。陳子昂。杜審言。を云ふ。沈宋は前に出づ。

蓋輝煌。武庫甲兵。旌旗飛動するが如し。少陵は、變幻閎深なること
は。崑崙に陟り。溟渤に泛び。千峯羅列し。萬彙汪洋たるが如し。

五七言絶

徐伯魯曰く。按ずるに。絶句の詩は。樂府に原づく。五言七言は。
唐初に。聲勢を穩順にし。定めて絶句と爲す。絶の言たるは。截
なり。律詩に卽きて。之れを截りたるなり。故に凡そ後の兩句對す
るものは。是れ前の四句を截りたるなり。前の兩句對するものは。
是れ後の四句を截りたるなり。全篇皆對するものは。是れ中の四
句を截りたるなり。皆對せざるものは。是れ首尾の四句を截りた
るなり。故に唐人の絶句は。皆律詩と稱す。李漢が。昌黎集を編み
たるとき。絶句は皆律詩の中に入れたるを以ても。蓋見るべし。大

抵。絶句の詩は。第三句を以て主と爲し。能く實事を以て意を寓す
るときは。則轉換して力あり。旨趣は深長なり。
五言は。眞切を尙ぶ。質多く文に勝つ。七言は高華を尙ぶ。文多
く質に勝つ。五言は樂府に近し。七言は歌行に近し。五言は。七言よ
り難し。要するに。皆微旨遠意あることを貴ぶ。語淺く情深く。開
合反正。一氣呵成し。宮商諧叶す。斯に正宗と爲す。
王龍標。李供奉は。允に絶句の神品と稱す。此れを外にしては。高
岑は激壯の音を起す。右丞は。幽遠の調多し。並に詞壇を擅にす
と云ふ。

龍標は王昌齡。供奉は李太白なり。高岑は高適。岑參なり。右丞は。王維なり。

六言詩

徐伯魯曰く。按ずるに。六言の詩は。漢の司農谷永より昉まる。魏

晉の間。曹植。陸機。陸雲。等間出し。其後。作者漸く多し。詩の一體に非ずと謂ふべからず。

竹枝詞

竹枝の詞は。風土の瑣細を詠ずるものにして。詼諧も皆此の中に入るべし。風趣を以て主と爲す。絶句に同じからず。

和韻の詩

徐伯魯曰く。按ずるに。和韻の詩。三體あり。一には。依ㇾ韻と曰ふ。此れは。同じく一韻の中に在りて。必しも其字を用ひざるが爲めなり。二には。次ㇾ韻と曰ふ。其原韻を和して。先後の次第。皆之れを用ふるを謂ふなり。三には。用ㇾ韻と曰ふ。其韻を用ひて。先後必しも

次せざるを謂ふなり。

聯句の詩

徐伯魯曰く。按ずるに。聯句の詩は。柏梁より起る。人各一句。集めて以て篇を成す。後に至り。人各〻二句。又人各〻四句の者あり。又人各〻一聯の者あり。先づ一句を出し。聯者之れに對し。聯者就きて一句を出し。前人復た之れに對するものあり。然れども。必其人。意氣相投じ。筆力相稱ひ。而して後に能く之れを爲す。若し否らざるときは。則謂ゆる狗馬之續となりて。世人の譏りを免れ難し。

詩餘

徐伯魯曰く。詩餘は古樂府の流別にして。後世歌曲の由りて起る所

なり。陸游云ふ。詩は晩唐五季に至り。體格卑陋となりて。千人一律なり。而して長短句は獨り精工。後人は及ぶこと莫し。何良俊云ふ。詩亡びて後に。樂府あり。樂府闕りて後に。詩餘あり。詩餘廢して後に。歌曲ありと。眞に知言なる哉。夫れ樂府と詩餘と。同じく管絃に被らしむ。特に樂府は。簡潔揚厲を以て工と爲し。詩餘は。婉麗流暢を以て美と爲す。此れ其同じからざるのみ。其調に定格あり。字に定數あり。韻に定聲あり。句の長短に至りては損益すべしと雖。亦率意に之を爲すべからず。

嚴滄浪の詩說

嚴滄浪曰く。詩の法五あり。曰く體製。曰く格力。曰く氣象。曰く興趣。曰く音節。○詩の品九あり。曰く高。曰く古。曰く深。曰く遠。曰く長。曰く雄渾。曰く飄逸。曰く悲壯。曰く凄婉。其工を用ふること三あり。曰く起結。曰く句法。曰く字眼。其大概二あり。曰く優游不迫。曰く沈着痛快。詩の極致に一あり。曰く神に入る。詩にして神に入らば。至れり盡せり。以て加ふること莫し。惟李杜のみ之れを得たり。他人は之れを得ること蓋寡し。

詩を學ぶには。先づ五俗を除くべし。一に曰く俗體。二に曰く俗意。三に曰く俗句。四に曰く俗字。五に曰く俗韻。○字を下すことは。響あるを貴ぶ。語を造ることは。圓なるを貴ぶ。意は透ることを貴ぶ。靴を隔て癢きを搔くが如くなるべからず。語は脫洒を貴ぶ。泥を挹み水を帶ぶるが如くなるべからず。語は直を忌む。意は淺きを忌む。脈は露るを忌む。味は短きを忌む。音韻は散緩を忌む。亦迫促を忌む。須らく活句に參すべし。死句に參す

ること勿れ。而して詞氣は須らく顔頗するところあるべし。

詩を學ぶに三節あり。其初は好惡を識らず。連篇累牘。筆を肆にして成る。既に羞愧を識りて。始て畏縮を生ず。之れを成すこと極めて難し。其透徹に及びては。則七縱八横。手に信せて拈り來り。頭々是れ道なり。

姜白石の詩說

大凡詩は。自から氣象。體面。血脈。韻度。あり。氣象は其渾厚ならんことを欲す。其失や俗なり。體面は其宏大ならんことを欲す。其失や狂なり。血脈は其貫穿せんことを欲す。其失や露なり。韻度は其飄逸ならんことを欲す。其失や輕なり。

大篇を作るは。尤も當さに布置して。首尾は停匀し。腰腹は肥滿せしむべし。世人の作を見るに。前面は餘りあるも。後面は足らず。前面は工を極むるも。後面は草々なるもの多し。知らざるべからず。

詩の工ならざるは。只是れ精思せざるのみ。思はずして作らば。多しといへども。亦奚を以て爲さんや。

人の言ひ易すき所は。我寡く之れを言ひ。人の言ひ難き所は。我易すく之れを言ふときは。自から俗ならず。

花には。必柳を用ひて對するは。是れ兒曹の語なり。若し其れ切ならざるは。亦病なり。

小詩は精深なり。短章は醞藉なり。大篇は開闔ありて乃ち妙なり。語は含蓄を貴ぶ。東坡云ふ。言は盡るありて。意は窮り無き者は。天下の至言なり。句中に餘味あり。篇中に餘意あるは。善の善な

るものなり。

物を體するは。寒乞なるを欲せず。意中に景あり。景中に意あることを要す。

波瀾開闔は。江湖中に在りて。一波未だ平ならずして。一波已に作るが如く。又兵家の陣。方さに以て正と爲せば。又復た是れ奇なり。方さに以て奇と爲せば。忽ち復た是れ正なるが如く。出入變化して紀極すべからず。而して法度は亂るべからざるなり。

意格は。高からんことを欲す。句法は。響んことを欲す。只工を句字の間に求むるは。亦末なり。故に意格に始めて。句字に成る。句意は深からんことを欲し。遠からんことを欲す。句調は清からんことを欲し。古ならんことを欲す。和ならんことを欲す。是れを作者と爲す。

詩に四種の高妙あり。一に曰く理高妙。二に曰く意高妙。三に曰く想高妙。四に曰く自然に高妙。

一篇全く尾句に在り。奔馬を截るが如く。辭意俱に盡くるあり。又水に臨みて。將さに歸んとするものを送るが如く。辭盡きて意は盡きざるあり。

情と景

趙汸曰く。詩家の作法は多しと雖。要するに。情を摹すると。景を寫すとに在りて。各其勝を極む。杜子美の五律中。景到るの語あり。落雁浮二寒水一飢烏集二戍樓一星垂二平野一濶月湧二大江一流の如きは是れなり。情到るの語あり。親朋無二一字一老病有二孤舟一一時今夕會。萬里故鄕情。の如きは是れなり。景中に情を含む者あり。感レ時花

濺レ涙。恨レ別鳥驚レ心。岸花飛送レ客。檣燕語留レ人。の如きは是れなり。情中に景を寓する者あり。影著啼猿樹。魂驚結蜃樓。正愁聞ニ塞笛一。獨立見ニ江船一。の如きは是れなり。情景相融して、區別すること能はざる者あり。水流心不レ競。雲在意俱遲。片雲天共遠。永夜月同孤。の如きは是れなり。一句は景を說き、一句は情を說く者あり。悠々照ニ遠塞一。悄々憶ニ京華一。の如きは是れなり。一句は情を說き、一句は景を說く者あり。白首多年病。秋天昨夜涼。の如きは是れなり。梅堯臣曰く。狀し難きの景を寫して。目前に在るが如く。盡きざるの意を含みて。言外に見はすと。是れ情景の秘要を統括したるものと謂ふべし。

劉彥得曰く。片言以て百意を明にすべし。坐馳以て萬景を役すべしと。亦能く情景の能事を簡括せるものと謂ふべし。

起承轉合

徐文弼曰く。起は猶ほ門を開きて。山を見るが如く。突兀峰巒たるべし。或は閑雲の壑を出るが如く。輕逸自在なるべし。承處は。草蛇灰線の如く。卽かず。離れず。轉處は。洪波萬頃。必高源あるが如くなるべし。合處は風廻り氣聚まり。淵泳含畜するが如くなるべし。然れども。一句には一句の起承轉合あり。一首には。一首の起承轉合あり。十首には。十首の起承轉合あり。今人詩を作るに。十首は。只是情景にして。十首を反覆するのみ。只是れ一首の意なり。

讀杜法

朱子曰く。詩を作らんとするものは。先づ李杜を看ること。士人

帳中歌

力拔山兮氣蓋世。時不利兮騅不逝。騅不逝兮可奈何。虞兮虞兮奈若何。

大風歌

大風起兮雲飛揚。威加海內兮歸故鄉。安得猛士兮守四方。

が本經を治むるが如くすべし。本既に立ちたるときは。方さに唐宋以下諸家の詩に及ぶべし。

帳中歌

朱子曰く。項羽が作りたる所の垓下帳中の歌。其詞は慷慨激烈にして。千載不平の餘憤あり。其成敗得失の若きは。則亦以て强にして義を知らざる者の深戒と爲すべし。

大風歌

文中子曰く。大風は。安して危きを忘れず。其れ霸心の存する乎。美なるかな。其之れを言へることや。漢の天下を有ちて。能く三代の王と爲らざる所以は。其れ是れを以てするにあるかなと。然

文中子は。隋の大儒。王通。字は仲淹なり

れども。千載以來。人主の詞にして。亦是の若く其壯麗にして奇偉なるものは。あらざるなり。嗚呼雄なるかな。

鈔香山遊草又塡餘白　土屋弘

七年不踐香山路。禽語溪聲依舊幽。洗得城中塵萬斛。清風一枕臥山樓。

莫是山中仙樂催。悠揚絲管遶樓臺。夜深人散溪聲大。乍訝前庭急雨來。

山中所見

噴泉怒嚙崖。老樹橫溪出。不怪氣如秋。綠陰巧

遮レ日。

觀レ瀑

雙白龍飛出。蜒蜿屈曲合爲レ一。群猛虎横逸。搏擊突怒躓且蹶。赤日中レ天勢如レ爇。來レ此忽覺氣栗冽。翻思當今各國互競攻伐。恰若龍虎奮鬪雌雄未決。嗚呼世運將來果何若。對レ此想レ彼能得レ無レ蹙頞。

頞烏割反。音遏。

詩論鈔附載

大正四年五月十八日印刷
大正四年五月廿八日發行

詩唐詩傳

定價金四拾錢

著作者　土屋弘

發行者　東京市小石川區原町六番地　高島大圓

印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十七番地　佐久間衡治

印刷所　東京市京橋區西紺屋町二十七番地　株式會社秀英舍

發兌元　東京小石川原町六　振替東京一五六八六　丙午出版社

不許複製

土屋鳳洲先生著 晩晴樓文鈔（和装全四冊）郵税八十錢 價一圓四十錢

土屋鳳洲先生著 晩晴樓詩鈔二編（和装全三冊）郵税八十錢 價七十錢

土屋鳳洲先生著 晩晴樓文鈔二編（和装全三冊）郵税八十五錢 價七十五錢

土屋鳳洲先生著 評解 唐宋八大家文鈔（和装全一冊）郵税八十五錢 價四十五錢

土屋鳳洲先生著 周易集解（洋装全一冊）郵税一圓八錢 價一圓八錢

釋清潭先生著 和漢 高僧名詩新釋（洋装全一冊）郵税六十錢 價五十錢

釋清潭先生著 寒山詩新釋（洋装全一冊）郵税八十錢 價五十錢

釋清潭先生著 狐禪狸詩（洋装全一冊）郵税八十錢 價六十錢

發兌元 東京振替小石川區原町六 京一六八六 丙午出版社

1RE
1.1

終